2013年京都国際地理学会議の報告

2013年８月４～９日に，国立京都国際会館をメイン会場に，国際地理学連合（IGU）の2013年京都国際地理学会議が開催された。以下は，その組織委員会の事務局および８つの委員会（募金，財務，プログラム出版，広報アウトリーチ，コミッション，会場，地理オリンピック，巡検）ごとの報告である。

この報告の掲載をお認めいただいた人文地理学会に，深く感謝する次第である。

2013年京都国際地理学会議組織委員会
委員長　石川義孝
事務局長　矢野桂司

事務局

１．事務局の構成

組織委員長：石川義孝（京都大学）
事務局長：矢野桂司（立命館大学）
副事務局長：小方登（京都大学）
役員：秋山元秀（滋賀大学），石川義孝（京都大学），碓井照子（奈良大学），小方登（京都大学），岡部篤行（青山学院大学），春山成子（三重大学），氷見山幸夫（北海道教育大学），村山祐司（筑波大学），矢野桂司（立命館大学）
委員：荒又美陽（恵泉女学園大学），井上学（平安女学院大学），大山修一（京都大学），香川雄一（滋賀県立大学），佐谷岳穂（立命館大学研究補助員），瀬戸寿一（東京大学），滝波章弘（首都大学東京），立見淳也（大阪市立大学），中谷友樹（立命館大学），花岡和聖（東北大学），二村太郎（同志社大学），松本文子（神戸大学），吉田道代（摂南大学）
協力者：安藤哲朗（京都大学助教），石田曜（京都大学院生），勝又阿暁（京都大学学生），権藤拓樹（京都大学学生），島本多敬（京都府立大学院生），谷本沙織（京都大学学生），寺岡郁夫（京都大学院生），長島雄毅（京都大学院生），橋詰奈央（京都大学学生），堀川泉（京都大学学生），馬貝妮（京都大学院生），南本徹（UCLA 院生），松浦智博（京都府立大学院生），森下翔太（京都大学院生）

２．開催決定までの経緯

日本に国際地理学連合（International Geographical Union, IGU）の地域会議（Regional Conference, RC）を誘致しようという提案は，2006年12月11日に開催された日本学術会議第３部地球惑星科学研究委員会 IGU 小委員会（現在の IGU 分科会の前身で，IGU 日本委員会を兼ねている）において，当時 IGU 副会長であった田邉裕教授（当時，慶応義塾大学）からなされた。この席で，会議は京都とすることが了承された。これを受け，2007年12月に，2014年の RC の京都招致をめざす計画書が，IGU 事務局に提出された。この計画書には，会議テーマを「地球の将来のための伝統智と近代知」とすること，および，会場を国立京都国際会館とすること，等が盛り込まれた。

そして，2008年５月５日にモスクワの科学アカデミーで開かれた IGU 役員会に，当時の IGU 日本委員会委員長であり地域会議招致委員会委員長の岡部篤行教授，IGU 日本委員会幹事の氷見山幸夫教授，招致委員会副委員長の石川の３名が出席し，2014年の RC を

京都に招致するためのプレゼンを行った。この時点で，2010年のテルアビブ RC と2012年の IGC ケルン大会は既に決まっており，2014年の RC に，日本（京都）以外に，ポーランド（クラコフ）とチリ（サンチャゴ）の 2 ヶ国が立候補しており，招致は激戦であった。ちなみに，2016年の IGC には，中国（北京）とロシア（モスクワ）が立候補していた。

プレゼンの済んだ同日夕方のカクテル・パーティーの席上，役員会では，RC に立候補した 3 ヶ国の中では日本の評価が最も高かったが，これまで開催実績が無いラテンアメリカでの RC 開催に傾いている，との意見が紹介され，プレゼンに出向いた 3 名の失望は大きかった。しかし，この時から翌 6 日朝にかけて，特に氷見山教授による役員への熱心な働きかけも奏功し，6日の正午前後に，役員会が2011年にサンチャゴ，2013年に京都，2014年にクラコフで RC を開催することを決定した，との連絡を受け，おおいに安堵した。

京都地域会議は，2008年 8 月の IGC チュニス大会総会で了承され，開催が正式に決まった。なお，2016年の IGC は，チュニス大会総会におけるプレゼン後の投票によって北京に決定し，落選したモスクワは2015年の RC 開催が決まった。

3．会議開催までの準備

2013年の京都地域会議の招致決定を受け，2008年 3 月16日に，IGU 分科会の中に準備委員会が発足した。そして，2009年 6 月 5 日に第 1 回会合を日本学術会議で，9月14日に第 2 回会合を京都国際会館で開催した。この第 2 回会合にさきだち，運営会社候補の 3 社のプレゼンが行われ，その内容を準備委員会で検討した結果，日本コンベンションサービス株式会社（以下，JCS）を運営会社とすることを決定した。

その後，2010年 6 月28日開催の IGU 分科会において，準備委員会が解散し，組織委員会が正式に発足した。同年 9 月13日に京都国際会館で第 1 回組織委員会が開催され，それまでの経緯が説明されるとともに，2013年までの活動の大枠について検討された。この会合で，組織委員長を石川，事務局長を矢野とすること，および事務局と 8 つの委員会（募金，財務，プログラム出版，広報アウトリーチ，コミッション，会場，地理オリンピック，巡検）を設置することが了承された。さらに，会議の英語名称は「Regional Conference」であるが，この直訳の日本語である「地域会議」は，世界規模で開催される国際会議の名称としては，不適切な印象を与えかねないうえ，1957年に東京で開催された同格の会議で「国際地理学会議」の名称が使用されていたため，氷見山教授の提案で，以後，会議の日本語による正式名称としては「2013年京都国際地理学会議」，英語名称としては「IGU Kyoto Regional Conference 2013」を用いることにした。以下の記述においては，会議の略称として KRC を用いたい。

KRC の宣伝媒体としては，2008年の IGC チュニス大会にあわせ，準備委員会が A4 用紙 3 つ折りのチラシを作成していた。会議の 2 年前となった2011年 3 月に KRC のロゴおよびポスター，8月にファースト・サーキュラー（英語・フランス語）を作成し，同年11月に開催されたサンチャゴ RC の日本ブースを中心に配布した。さらに，2012年 8 月にセカンド・サーキュラー（英語・フランス語）を作成し，同年 8 月下旬に開催された IGC ケルン大会でも，日本ブースを中心に配布し，宣伝に努めた。また，大会開始の前日 8 月25日には，外務省の在ジュッセルドルフ総領事館主催で，ケルン市内のレストランに IGU 役員を招待した夕食会を開催し，1 年後の KRC への協力を求めた。

また，2010年のテルアビブ RC と2011年のサンチャゴ RC の閉会式で，KRC への参加を呼びかける挨拶を，それぞれ氷見山教授と石川が行った。

2012月 3 月27日の日本地理学会春季大会（首都大学東京）において，Ronald Abler 前 IGU 会長と Dieter Soyez 副会長をお迎えして，日本地理学会特別講演会「2013年京都国際地理学会議に向けて」が開催され，日本国内向けに KRC 開催の機運を高めた。

2012年 6 月 5 日に，KRC が IGU 日本委員会と日本学術会議との共同主催となることが，閣議で口頭了承された。これにより，講演や発表で使う会場使用料が全額，日本学術会議から助成されることが決定し，KRC の収支計画に大きく貢献することになった。

2012年の IGC ケルン大会の閉会式では，石川がドイツ語で，矢野が英語で，事務局委員の松本文子がフランス語で，KRC 参加を呼びかける合計 5 分の挨拶を行った。さらに，近隣諸国から多数の参加者に来ていただけるよう，2012年 4 月21日に中国地理学会大会（台北市，中国文化大学）で，5月25日に大韓地理学会大会（ソウル市，ソウル大学）で，および，10月13日に中国地理学会大会（開封市，河南大学）で，石川が

KRC の宣伝プレゼンを行った。

KRC が間近に迫った IGC ケルン大会直後から，10月初めにアブストラクト，ブース，巡検等の募集をホームページ上で開始できるようにするため，事務局は，広報アウトリーチ委員会，プログラム出版委員会，会場委員会等との調整を進めた。アブストラクトの締め切りは，当初2013年１月15日であったが，申し込みが低調だったため，2月４日まで延長した。

事務局は，組織委員会全体の要の役割を果たしているため，各委員会，JCS, 国際会館，その他と，何度も準備のための会合を持った。組織委員会全体の会合は，経費節約のため，2010年９月13日に一度持っただけである。ちなみに，KRC 開催前の１年間に限っても，事務局の会合あるいは事務局が加わった会合は，以下のように20回を越えた。

2012年

９月27日　事務局の業務分担に関する打ち合わせ（京都市内居酒屋）

10月１日　発表申し込みに関する打ち合わせ（JCS 関西支社）

12月14日　参加者への配布物に関する打ち合わせ（京都文化交流コンベンションビューロー）

12月18日　発表申し込みに関する打ち合わせ（立命館大学）

2013年

１月24日　査読やプログラム編成に関する打ち合わせ（キャンパスプラザ京都）

３月５日　プログラム編成や会場使用計画に関する打ち合わせ（立命館大学）

３月29日　募金委員会，プログラム出版委員会との合同打ち合わせ（立正大学）

４月23日　会場委員会との打ち合わせ（京都大学）

５月18日　会計士との打ち合わせ（KDA 監査法人）

６月７日　会計士との打ち合わせ（立命館大学）

６月10日　会場委員会との打ち合わせ（国際会館）

６月14日　科学技術振興機構（JST）との地理オリンピック表彰式に関する打ち合わせ（国際会館）

６月25日　国際会館，JCS との打ち合わせ（国際会館）

６月30日　会場委員会との打ち合わせ（キャンパスプラザ京都）

７月５日　京都府警との警備に関する打ち合わせ（京都府警）

７月５日　警備会社との警備に関する打ち合わせ（京滋綜合警備保障株式会社）

７月12日　宮内庁との両殿下御臨席に関する打ち合わせ（赤坂御用地）

７月18日　京都府警，警備会社，国際会館，JCS との警備に関する合同打ち合わせ（国際会館）

７月22日　御進講（赤坂御用地）

７月23日　リコージャパン（株），国際会館との会場内広報に関する打ち合わせ（国際会館）

７月29日　プレス発表（宮内庁，JST, 京都大学）

８月３日　コングレスバッグへの配布物品の封入（国際会館）

８月４日　事務局の全体打ち合わせ（国際会館）

８月４日　開会式のリハーサル（国際会館）

４．KRC を含む期間の詳細

IGU 役員との交流　KRC 開催の前日８月３日に，IGU 役員の方々を対象に，KRC の会議テーマ「地球の将来のための伝統智と近代知」を現地体験してもらうための滋賀・福井方面への巡検を，田中和子教授（京都大学）や野間晴雄教授（関西大学）が企画・実施し，大変好評であった。４日夕方には，わが国の地理関連学協会の連合体である地理学連携機構主催による「2013年京都国際地理学会議のための交流の夕べ」が開催され，大西隆日本学術会議会長，IGU 役員，国内地理学コミュニテイの代表者が交流を深めた。また，それに先立ち，日本学術会議会長と IGU 役員会との意見交換会が実施され，地球理解国際年（International Year of Global Understanding, IYGU）等について議論された。

市民公開講座　８月４日に，京都大学百周年時計台記念館において，市民公開講座が開催された。これは，KRC が IGU 日本委員会と日本学術会議の共催によって開催されることを記念し，国民への成果の還元を目的として，日本語で開催された。詳細は，本稿の広報アウトリーチ委員会の報告を参照いただきたい。

地図展　７月31日～９月１日に，京都大学博物館において，KRC 開催を記念して，地図展「温故知新」が開催された。KRC の名札の持参者は，無料で入場で

第1表　参加登録者数

登録カテゴリー		登録料（円）	登録者数（人）	
一般	早期	49,000	747	1,048
	通常	55,000	137	
	当日	65,000	9	
	1日	25,000	155	
学生	早期	20,000	221	289
	通常	30,000	23	
	当日	35,000	1	
	1日	15,000	44	
同伴者	早期	15,000	40	49
	通常	20,000	6	
	当日	25,000	1	
	子供	0	2	
招待者（無料登録者）		0	45	45
合　計			1,431	

きた。名札持参による入場者数はあいにく記録されていないが，入場者総数は9,827人に達した。

参加者数・発表数　KRC の参加者は1,431人であり，そのカテゴリー別の内訳は第1表の通りである。なお，表中の招待者（無料登録者）は，IGU 役員，プレナリー・セッションの講演者，途上国から参加しグラントを受賞した若手研究者を指している。

また，参加者は，国内688人，海外743人（61ヶ国・地域）であり，国・地域別内訳は，第2表のとおりである。

この参加者数は，当初予定を大きく上回り，IGU の RC としては異例の多さとなった。ちなみに，1980年の IGC 東京大会の参加者数は，第24回国際地理学会議組織委員会編（1981）『第24回国際地理学会議報告書』p. 160，によれば，1,542人（国内750名，63ヶ国・地域）であり，KRC の参加者数はこれにわずかに及ばないものの，ほぼ匹敵する。

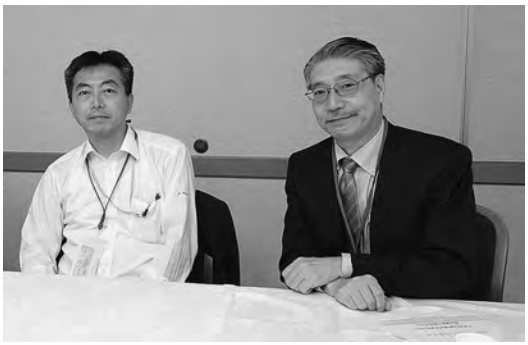
また，8月5日午後から8日午後にかけて，各種セッションが開催された。セッションの種別の数を挙げると，プレナリー・セッション9件，コミッション・セッション780件，一般セッション254件，ジョイント・セッション76件，特別セッション8件，ポスター128件，その他1件，合計1,256件となる。この発表数も，当初の想定を上回っており，組織委員会にとって嬉しい誤算であった。

事務局控室　8月4日～9日の会議期間中，1階の Room104B に事務局控室を設け，業務にあたった。ここには，リコージャパン（株）から提供していただいたカラー複合機が設置され，事務局の業務遂行におおいに力を発揮した。また，プログラム出版委員会や財務委員会のメンバーもしばしばここに詰め，プログラムや会計の支払い等に関する打ち合わせも行われた。なお，この控室は，IGU 役員会の控室 Room104A と隣り合わせとなっていたため，会議期間中の IGU 役員会と KRC 事務局の連絡は，円滑に進んだ。

第2表　国・地域別の参加者数

国・地域	参加者数（人）	国・地域	参加者数（人）
Argentina	1	Myanmar	1
Australia	26	New Zealand	13
Austria	2	Nigeria	12
Bangladesh	1	Norway	2
Belarus	1	Oman	1
Belgium	2	Peru	1
Brazil	7	Poland	23
Canada	10	Portugal	2
Chile	6	Republic of Korea	29
China	53	Romania	4
Colombia	2	Russia	49
Czech Republic	7	Saudi Arabia	6
Egypt	2	Senegal	1
Ethiopia	1	Singapore	12
Finland	9	Slovakia	5
France	27	Slovenia	6
Georgia	1	South Africa	10
Germany	23	Spain	16
Ghana	1	Sweden	10
Greece	1	Switzerland	9
Hong Kong	26	Taiwan	78
Hungary	4	Thailand	8
India	55	The Netherlands	9
Indonesia	4	Tunisia	1
Israel	20	Turkey	5
Italy	23	UK	28
Japan	688	Ukraine	4
Kazakhstan	2	USA	70
Latvia	2	Viet Nam	1
Mexico	5	Zambia	1
Mongolia	2	総　計	1,431

登録エリア　国際会館正面玄関入口付近に，参加者が登録を行うエリアを設けた。このエリアは，JCS が担当した。参加者は，会議自動登録機から，名札・バッグチケット・参加証明書等が印刷された紙を受け取り，そのバッグチケットをバッグ交換所に持参し，コングレスバッグおよびペットボトル入りの水を受け取った（1,600人分を用意）。なお，コングレスバッグに封入



第1図　事務局控室での矢野事務局長（左）と石川委員長（右）

第2図　KRCの会場となった京都国際会館

する物品（プログラム，発表者のアブストラクトおよび「*Geographical Review of Japan Series B*」と「人文地理」の特集号寄稿の英文論文を保存したUSBメモリー，ロゴ入りレポート用紙，会議名入りボールペン，周辺レストラン案内，和英併記市内地図，京大博物館地図展リーフレット・ポストカード，IGUリーフレット，IYGUポストカード，モスクワRCのリーフレット）は，小方が中心となって用意した。

インフォメーション・デスク　1階の登録エリアの奥，エレベーターの前に，インフォメーション・デスクが設置され，事務局委員および協力者が，常時4名前後待機した。ここでは，茶会参加の申し込み受付や参加費の徴収，Tシャツの無償配布のほか，参加者からの各種の問い合わせに対応した。

展示ブース　国際会館のアネックスホールⅠに，ポスター発表と同じ会場で展示ブースを設けた。展示ブースの募集や対応はJCSにお願いし，展示ブースの割り振りは会場委員会が行った。展示ブースは，1小間（3m×2m，138,000円）タイプと2小間タイプ（6m×2m，230,000円）を用意し，ほぼ原価ベースで提供した。最終的に以下の17団体が展示ブースを出した。IGU日本国内委員会，公益社団法人日本地理学会，公益社団法人日本地球惑星科学連合，特定非営利活動法人日本ジオパークネットワーク，Association of American Geographers（AAG），The Geographical Society of China, The Geographical Society of China located in Taipei, Polish Geographical Society, National Committee of Russian Geographers of the International Geographical Union, 国土交通省国土地理院，一般財団法人日本地図センター，株式会社渡辺教具製作所，ESRIジャパン株式会社，株式会社オークニー，株式会社きもと，Society for Indigenous Resource Promotion, Springer。

開会式　8月5日の10:30～12:00に国際会館メインホールで開催された開会式では，秋篠宮同妃両殿下ご臨席のもと，組織委員会の石川委員長，IGU日本委員会の春山成子委員長，日本学術会議の大西隆会長，IGUのVladimir Kolossov会長の挨拶の後，秋篠宮殿下のお言葉をいただいた。殿下のお言葉は，ご自身のこれまでのご関心を踏まえ，地理学の統合的視角の重要性を強調されたもので，参加者に大きな感銘を与えた（このお言葉は，2013年12月末刊行の「人文地理」65巻6号に掲載済みである）。さらにその後，京都市の塚本稔副市長，文部科学省の下村博文大臣（福井照副大臣が代読），安倍晋三内閣総理大臣（春山委員長が代読）の祝辞ののち，第10回国際地理オリンピック京都大会の金メダル受賞者11名の発表が，国際地理オリンピック委員会のKathryn Berg共同委員長から行われ，その後，福井副大臣から受賞者へメダルが授与された。最後に，吉田道代事務局委員の司会で，関西福祉大学金光藤蔭高校和太鼓部「鼓響」によるアトラクションが行われ，好評を博した。アトラクションの箇所を除き，司会は矢野が務めた。

カクテル・パーティー　8月5日18:00～19:30に，矢野の司会で，国際会館の「スワン」および庭園においてカクテル・パーティーが開催された。冒頭，Kolossov IGU会長の挨拶の後，乾杯の発声が行われた。組織委員会から伏見の日本酒の差し入れを行ったが，なかなか好評であった。

ガラ・ディナー　8月7日18:30～21:00に，「がんこ

第3図　開会式に臨席された秋篠宮同妃両殿下

高瀬川二条苑」においてガラ・ディナーが開催された（参加者は約300名）。司会は，矢野が担当した。冒頭，コロソフ会長の挨拶があった。ついで，東京地学協会の野上道男会長による挨拶があり，Ronald Abler 前 IGU 会長に東京地学協会メダルが授与された後，同氏の挨拶があった。

ランチ　ランチに関しては，収支の全体的な状況が不明確な2013年４月までの段階では，提供が難しく，参加者に国際会館周辺のレストランをすすめることを考えざるを得なかった。しかし，会議は真夏に開催されるため，参加者が館外に出ると熱中症にかかる心配があり，大きな検討課題となっていた。幸いにも，4月末に，収支状況の好転を期待できる見通しがたったため，組織委員会から来館者数分のランチを提供することを決定した。この件を主に担当したのは二村である。ちなみに，実際に提供したランチの数は，8月５日800人分，6日800人分，7日700分，8日800人分であった。これらの数は，7日にわずかに不足だっただけであり，事務局の予測がほぼ的中した。

閉会式　８月９日10：00～11：30に，国際会館アネックスホールＩで開かれた閉会式では，組織委員会の石川委員長，IGU 日本委員会の春山委員長，Kolossov IGU 会長の挨拶の後，IGU Lauréats d'Honneur（IGU 桂冠賞）の Ton Dietz 教授への表彰式が行われた。その後，日本地理学会の矢ケ崎典隆会長の挨拶のあと，Abler 前 IGU 会長に，日本地理学会名誉会員就任の表彰が行われた。その後，若手の優秀ポスター発表者に対し，広報アウトリーチ委員会の小口高委員長から表彰が行われた。さらに，IGU グラント受賞者に対し，IGU の Michael Meadows 事務局長から，KRC グラント受賞者への表彰が，プログラム出版委員会の岡本耕平委員長から行われた。最後に，2014～2016年までの RC および IGC 開催国を代表し，ポーランドの Marek Degórski 教授，ロシアのアカデミー会員 Nikolay Kasimov 教授，中国の Chenghu Zhou 教授が，挨拶をされた。なお，司会は矢野が務めた。

若手研究者の支援　KRC では若手研究者の支援に力を入れたことにも，ここで言及しておきたい（ここで若手研究者とは，学生というカテゴリーで登録した参加者をさす）。具体的に述べると，登録料の額を一

第4図　チェアーズ・ミーティングで挨拶される IGU の Kolossov 会長

般の半額程度に押さえたのみならず，閉会式において，優秀ポスター発表者4名（台湾1，日本2，米国1）と，途上国から参加したグラント受賞者（旅費・滞在費受給者あるいは登録料免除者）20名（イギリス1，イタリア1，インド4，インドネシア1，エストニア1，タイ1，中国2，ドイツ1，フランス1，香港5，ロシア2）の表彰を行った。このグラントは，東京地学協会と人文地理学会からの支援によって実現したものである。ちなみに，IGU のグラント受賞者（途上国から参加した旅費受給者）27名（イギリス1，イスラエル1，イラン1，インド4，ジンバブエ1，スウェーデン1，スペイン1，台湾1，中国1，チュニジア1，デンマーク1，ナイジェリア1，フィンランド1，米国2，米国／台湾1，ベトナム1，ペルー1，ポーランド1，南アフリカ1，モンゴル1，ロシア3）も，あわせて表彰された。なお，ここでの国名は，留学先の大学の所在地からカウントされているケースも含まれていることに，ご留意いただきたい。閉会式での若手研究者のこうした顕彰は，IGC あるいは RC ではおそらく初めてのことと思われる。

事務局の業務　上記以外に，事務局委員が具体的に準備を担当した主な業務についても，言及しておきたい。

第一に，IGU の IGC と RC は基本的に英語・フランス語を公用語としているため，KRC では，フランス語アブストラクトによる発表申し込み（10件）も受け入れることにした。また，サーキュラーのフランス語版作成にご協力をいただくため，あるいはフランス語によるメールでの問い合わせや，会議期間中にフランス語による質問がインフォメーション・デスクに寄せられることを念頭に置き，事務局内にフランス語のできる委員を4名（滝波，荒又，松本，立見）確保した。

第二に，日本交通公社（JTB）によるソーシャル・プログラムへの申し込みが低調だったため，松本と香川が中心となって，8月6～7日に，国際会館にある茶室「宝松庵」での茶会を企画した（参加費は一人1,000円）。これは，裏千家の先生方によるボランティア・サービスによって実現可能となったが，裏千家との交渉は岡本文音先生（高野山大学客員教授）にご尽力いただいた。最終的に参加者は約160名に達し，好評を博した。

第三に，リコージャパン（株）からの機材の借出しをうけ，会場である国際会館の館内の5箇所で，単焦点プロジェクター（スクリーンまでの距離が数10 cm 程度で投影するプロジェクター）を使った会場広報サービスを行った。これは，中谷，花岡，瀬戸が担当した。具体的な作業としては，参加者の国・地域別分布図，当日のプログラム変更，当日の基調講演情報，セレモニー，茶会，カクテル・パーティー，ガラ・ディナー等の当日のイベント，各会場の状況を伝える写真画像類を，パワーポイント・スライドとして作成し，10秒程度のスライド投影間隔をもって繰り返し投影した。また，会場広報活動を補完するために，Twitter アカウント（@igu_kyoto）を作成し，各種イベントの開始や注意点の周知や，参加者による情報交換の場として利用した（tweet 数：103）。他に，リコージャパン（株）からは，カラー A3 複合機およびカメラ付き遠隔通信システム（ユニファイド・コミュニケーションシステム）の機材を借り受けた。遠隔通信システムは，事務局控室とインフォメーション・デスク（茶会受付を兼ねる）とを結び，各種の意思決定・確認事項の通達に有用であった。

他に，会場委員会委員および会場の各部屋とインフォメーション・デスクでの協力者，合計108人用に，T シャツを用意した。これは，大山が担当した。250枚を作成し，各人に2枚配布し，残りは，IGU 役員および希望した参加者に配布した。また，開会式でのアトラクションについて，事務局で検討した結果，和太鼓演奏に決定した。これは，吉田が担当した。摂南大学に OB を送りだしている関西福祉大学金光藤蔭高校和太鼓部「鼓響」に開会式での演奏を依頼し，好評を博した。さらに，会議期間中，主なイベントで写真

撮影を行った。これは，小方，井上，立見，荒又が担当した。撮った写真の一部は，KRC のフォトギャラリーとして，公式ホームページに掲載した。また，JST, 京都府警，宮内庁との連絡や，事務局控室での参加証明書の発行を行った。これは，佐谷が担当した。

5．評価および反省点

会議期間中多くの参加者から，および会議後に IGU 役員から，緻密な会議運営に対し，高い評価をいただいた。公式ホームページを通じてのアンケート調査の結果でも，全体的に好意的な評価が相次いだ。その原因として，筆者たちは，少なくとも以下の 2 点を挙げることができると考えている。

第一に，少なくとも，2012年の年末までは，日本の円が高かったため，海外からの参加者数が少なくなるだろうとの懸念を組織委員会では持っていた。また，2008年秋に生じたリーマン・ショックの直後の経済環境では，企業からの募金総額が目標の2,000万円に届くのは難しいという心配もあった。そのため，会議経費をできるだけ押さえ，かつ収入を増やすため，組織委員会のすべてのメンバーが会議の企画や運営に独自の工夫をこらし，懸命の努力を重ねることになった。これが，KRC に好結果をもたらしたように思われる。2012年12月からは円安も進み，それが KRC の参加者の増加に貢献した。

第二に，会場として京都国際会館を利用した点を挙げることができよう。ケルン大学を会場として開催された2012年の IGC が大きな成功を収めたことは，われわれにとって少なからぬプレッシャーであった。会議場で開催される IGC あるいは RC は，2008年の IGC チュニス大会以来だったが，この大会の会議自体，ひどく評判が悪かったからである。しかし，国際会館を会場とすることは，京都の中に，会議の部屋として使える多数の教室を持つ大学がほとんど存在しないという状況のため，やむなく決まったのであり，大学を会場とするという選択肢は，当初からわれわれの念頭になかった。一方，国際会館のスタッフは大規模な国際会議運営のノウハウに詳しいだけでなく，KRC に対しとても協力的であったし，同館の会場使用料の全額（621万円）が日本学術会議から助成されたため，登録料を妥当な額に抑えることができた。つまり，国際会館の利用が高い登録料につながる，ということはなかった。さらに，国際会館は京都議定書が生まれた場所であったため，たとえば地球環境や災害・防災といった，地理学における縦割りされた既往の諸分野を横断し，かつ隣接分野との連携が不可欠な大きなテーマの重要性を強調し，KRC の意義を訴えることが可能となり，多数の参加者を集めるが可能になった，と考えている。

とはいえ，反省点がない訳ではない。KRC の具体的準備は，基本的に 8 つの委員会ごとに分担して進めてきた。しかし，会議が近づくにつれこなすべき業務が急増し，特定の委員会に依頼しにくい業務は，基本的にすべて事務局で引き受けざるを得なかった。こうした負担増に関しては，事務局付きの委員の数を増やすことで対応した結果，会議開始の時点で13人に膨らむことになった。

また，ホームページを通じて行った参加者へのアンケート調査からも，KRC の評価を確認できる。会議の運営（発表募集，プログラム，情報伝達，組織委員会の対応等），施設・会場，食事，ソーシャル・プログラム，巡検等の項目に関して 5 段階評価でアンケート調査を実施し計132名から回答を得た。多くの項目で Very Good, Good と Average 以上の評価をいただいた。Average が多かったのは，とりわけ食事（ランチやコーヒー）に関するものであった。また，自由回答でいただいたコメントとしては，良かった点では，発表内容が良かった，組織委員会の運営が良かった等が多くみられ，改善すべき点としては，日本人発表者がもっと議論に積極的に加わるべき，ランチの内容をより充実すべき等の指摘が見られた。アンケート調査以外にも，事務局にはお礼のメールが多数寄せられ，本会議は極めて成功裡に運営されたといえる。

なお，IGU 役員会に対する KRC の英文の公式報告書は，石川・矢野の連名でまとめ，2013年 9 月下旬に提出済みである。

6．謝辞

組織委員会を代表し，筆者たちは，KRC に参加された方々，および会議準備にご協力いただいた方々や組織に，謝意を申し上げたい。ここで，すべてのお名前や組織名を述べることができないが，特に，KRC に対しひとかたならぬご支援とご協力をいただいた，Kolossov 会長をはじめとする IGU 役員会の皆様，および，財政支援を含む強力なご支援をいただいた日本地理学会，人文地理学会，東京地学協会，地理情報シ

ステム学会，東北地理学会，地理科学学会，経済地理学会，歴史地理学会，日本地形学連合，日本第四紀学会の10学協会や，京都市，福武学術文化振興財団，日本地図センター，国土地理協会，さらに，多額のご寄付をいただいた個人の方々および企業等に，心から感謝を申し上げたい。また，会場となった国立京都国際会館と運営会社の JCS の熱心なご協力にも，深くお礼を申し上げる次第である。　（石川義孝・矢野桂司）

募金委員会

１．募金委員会の構成

委員長：秋山元秀（滋賀大学）

副委員長：小島泰雄（京都大学）

委員：荒井良雄（東京大学），池谷和信（国立民族学博物館），岡部篤行（青山学院大学），加藤恵正（兵庫県立大学），川端基夫（関西学院大学），高橋誠（名古屋大学），高山正樹（大阪大学），林和生（國學院大學），藤巻正己（立命館大学），松原宏（東京大学），水野一晴（京都大学），山下清海（筑波大学）

顧問：（顧問は本委員会のためだけに設けられたものではないが，本会の活動に対しては特に大きな貢献があったのでここに列記する）
青木栄一（東京学芸大学名誉教授），石井英也（筑波大学名誉教授），石原潤（奈良大学），伊藤達雄（三重大学名誉教授），榧根勇（筑波大学名誉教授），金田章裕（人間文化研究機構），千田稔（奈良県立図書情報館），田邉裕（東京大学名誉教授），谷岡武雄（立命館大学名誉教授），中村和郎（駒澤大学名誉教授），西川治（東京大学名誉教授），野上道男（東京都立大学名誉教授），野々村邦夫（日本地図センター），正井泰夫（立正大学名誉教授），吉野正敏（筑波大学名誉教授）

２．委員会の開催と準備状況

2010年９月13日に開催された組織委員会で募金委員が会同して以来，春秋の学会開催にあわせて以下のとおり委員会を開催した。委員会には必要に応じて随時，組織委員会および顧問にも出席を依頼した。なお，委員会の開催は限られているが，随時起ってきた課題に対しては臨機応変にメール等で連絡を取り合い，必要な措置をとった。

第１回　2011年３月28日（月）明治大学

募金目標額を2,000万円にすることや，募金に当っては JNTO（独立行政法人国際観光振興機構，通称日本政府観光局）を窓口にすることにより，企業募金，個人募金共に税制上の優遇措置を受けられるようにすることを確認した。また，秋から募金活動を開始するための募金依頼書と募金依頼名簿の作成や，企業への呼びかけにあたる委員の担当について議論した。

第２回　2011年11月13日（日）立教大学

今年度中に，いくつかの企業・法人に募金依頼を開始すること，それを担当する委員を確認した。また，高額の募金を行った企業に対する優遇策として，無料でオブザーバー参加を可能にしたり，企業の名称やロゴマーク等を，ホームページや当日のプログラム上で顕彰したりするような方式を考えることを，事務局に提案することにした。企業・法人募金に関しては，とくに委員だけでなく顧問への協力を依頼することにした。

第３回　2012年３月28日（水）首都大学東京

第２回以降の活動で，一部の地理関連企業から高額の寄付が得られることが判明し，このような活動を継続していることが確認された。地理学に関連する各分野の動向が関係委員から報告された。また，先回発案した募金企業・法人への優遇策を，早急に具体化することにした。個人募金についても，今春から学会や大学の地理学教室を通じて行うことが確認された。

第４回　2012年10月６日（土）神戸大学

事務局と協議の結果，募金企業・法人への優遇策が作成されたことを報告，今後，これで呼びかけていくことを確認した。個人募金を拡大するために，学会の主要なメンバーにダイレクトメールを送って，直接依頼する方法をとることにした。また学会開催時に，本会議としての受付を設け，個人募金にも応じることにした。個人募金には簡便な方法として，郵便振替口座を設けることにした。

第５回　2013年３月29日（金）立正大学熊谷キャンパス

これまでの活動を総括するとともに，これまで対象としてきた企業・法人および個人に対して最終的な働きかけを行うことを確認した。また，募金に応じた企業・法人に対して，優遇措置をはじめ，募金によって今後も含め地理学界との連携を深めるような呼びかけ

をすることが必要であることを議論した。また，会議終了後の礼状の発送等についても話し合った。

3．目標額の設定と JNTO による募金管理

前回，1980年の IGC 東京大会においては約5,000万円の募金実績があったが，今回は会議の規模や現今の経済情勢等を考慮して，2,000万円という目標額を設定した。とくに企業法人募金にあたっては，募金の用途を明確にすることが肝要であり，単に開催経費の補助というのではなく，途上国からの研究者に対する支援等，会議としての明確なポリシーをもりこんだ依頼状の作成をこころがけた。

今回の募金に当たっては，その窓口としての口座を JNTO に開設することにした。これによって一定の管理費（募金額の４～５％相当）がかかるものの，資金の管理上の便宜と，募金に応じる企業・法人や個人の税制上の優遇措置が受けられることを考慮すれば，大きなメリットがあると判断した。また，国際会議開催の豊富な経験に基づくマニュアルも入手でき，適切なアドバイスも受けることができた。

2010年12月から申請の準備に取り掛かり，翌年２月に申請書を提出した。同３月に審査を受けて申請が認められ，4月から募金の受付が可能になった。

今回の募金に当って企業・法人・団体募金は98％，個人募金でも92％が JNTO の口座を利用した。JNTO を通じた募金総額は2,191万円に上り，当初の目標額2,000万円を超えた。そのため，途中で目標額を修正する手続きを行った。

4．企業・法人募金

当初は，現今の経済状況を考慮すれば，企業・法人からの募金は厳しい結果が予想されたが，本委員会の顧問，委員，また本委員会以外の役員諸氏のご尽力により，総計31件，総額1,378万円の募金を得ることができた。内訳では100万円を超える募金が８件，50万～100万円が４件と，高額の募金を得たことが総額を押し上げた。企業・法人の業務内容としては，地図，GIS, 測量関連企業・法人，地理学関連出版社，交通運輸関連企業等のほか，役員委員諸氏の個人的な関係からの要請によるものもあり，それらの結果，予想を超える総額に至ることができた。

また，日本学術会議や日本地理学会，人文地理学会をはじめとする学術団体，福武財団等の法人からも支援を得たが，これは事務局や財務委員会で直接取り扱った。

第５図　募金のお願いで渡辺教具製作所を訪問
（左から，秋山募金委員長，千田組織委員会顧問，渡辺会長）

募金をいただいた企業・法人は，その時点で名称，金額，ロゴマークを英文と和文のホームページに掲載した。また，会議のプログラム冊子にもロゴマークを掲載した。優遇措置としては，20万円を超える募金を行った場合は，その金額に応じた人員が一般の参加者と同等の資格で参加できるようにしたり，ブース設置の経費の割引を行なったりした。また参加企業の中には，合同で特別セッションを設定したグループもあった。

募金をいただいた企業・法人・団体は以下のとおりである（ホームページ掲載順）。

株式会社帝国書院，ESRI ジャパン株式会社，株式会社きもと，近畿日本鉄道株式会社，株式会社ゼンリン，国際航業株式会社，一般財団法人日本地図センター，株式会社パスコ，アジア航測株式会社，持田製薬株式会社，株式会社リコー，株式会社渡辺教具製作所，朝日航洋株式会社，中日本航空株式会社，株式会社二宮書店，東京書籍株式会社，公益社団法人日本測量協会，Wiley, アートコーポレーション株式会社，株式会社かんこう，株式会社昭文社，内外エンジニアリング株式会社，霞が関地理学会，株式会社朝倉書店，一般財団法人日本水路協会，一般財団法人日本デジタル道路地図協会，一般財団法人リモート・センシング技術センター，立命館地理学会，株式会社 JPS, 一般社団法人地図調製技術協会

5．個人募金

個人募金を推進する方策としては，随時開催される地理学関連学会の総会や懇親会，あるいは地理学教室

を持つ大学の同窓会等の機会において委員長や委員が発言して募金を要請した。また各学会の現役員・各種委員，過去の役員経験者等にダイレクトメールを発送して要請することも，複数回行った。その結果，総計153件（2013年３月の日本地理学会での募金箱によるカンパを含む），総額1,024万4,723円の募金を得ることができた。個人募金の場合は，郵便振替口座を利用した募金もあった。個人募金者も，和文ホームページに全員の氏名と金額（10万円以上のみ）を掲載した。

個人募金152件の内訳としては，20万円以上が19件，10万円以上～20万円未満が24件，5万円以上～10万円未満が27件，5万円未満が82件であった。平均としては１件当たり６万7,000円余となる。時期については，2012年前半期までの納付額は総額の7.4％にすぎないが，12年後半期には44.1％が，13年前半期には28.2％が納付されており，12年後半期から13年前半期にかけて過半の募金が行われたことを示している。13年の７月以降でも総額の20.3％が納付されており，会議直前まで呼びかけたことも一定の効果があったことを示している。

個人募金は，日本地理学会，人文地理学会等地理学関係学会会員（名誉会員等を含む），関連企業の役員等，以下のとおり152人の方々からいただいた。また，学会大会時の募金箱にも，一定額の募金をいただいた（個人募金者氏名　五十音順）。

青木栄一，秋山道雄，秋山元秀，阿部和俊，阿部隆，阿部康久，新井正，荒井良雄，荒木一視，生田真人，池俊介，石井英也，石川義孝，石原潤，石丸哲史，井田仁康，出田和久，伊東理，伊藤達雄，稲垣稜，今里悟之，岩本廣美，上野和彦，牛垣雄矢，碓井照子，遠藤匡俊，大塚俊幸，大西宏治，小方登，岡橋秀典，岡部篤行，岡本耕平，小口高，奥村晃史，落合康浩，小俣利男，香川貴志，片平博文，金坂清則，河合保生，河島一仁，川端基夫，菊池俊夫，木本和伸，金枓哲，金田章裕，熊木洋太，呉羽正昭，小泉武栄，古賀慎二，小島泰雄，米家泰作，酒井高正，境田清隆，坂本睦士，佐野充，沢田清，式正英，島方洸一，島田周平，島津俊之，志村喬，須貝俊彦，杉浦直，杉浦芳夫，鈴木康弘，千田稔，高木彰彦，高野武男，高橋眞一，高橋春成，高橋誠一，高橋日出男，高橋誠，高山正樹，滝沢由美子，竹内裕一，田邉裕，谷内達，田林明，田和正孝，千葉立也，堤純，手塚章，土井仙吉，戸井田克己，戸所隆，友澤和夫，長島弘道，永田淳嗣，中谷友樹，中村和郎，西岡尚也，西川治，仁科淳司，西原純，西脇保幸，仁平尊明，根田克彦，野上道男，野間晴雄，箸本健二，橋本雄一，原芳生，春山成子，日野正輝，氷見山幸夫，平井幸弘，平岡昭利，平野忠，藤井正，藤巻正己，細川幸也，前田昇，松橋公治，松原宏，松本淳，松本博之，三木一彦，三木理史，水嶋一雄，水田義一，水野一晴，水野真彦，溝口常俊，南出真助，源昌久，宮口侗廸，宮澤武久，村山祐司，森川洋，矢ケ﨑典隆，八木康幸，矢野桂司，山縣重信，山崎静雄，山下清海，山下脩二，山田誠，山近久美子，山根拓，山野正彦，山本健兒，山本正三，由井義通，横山智，吉越昭久，吉田栄夫，吉田道代，吉野正敏，若林芳樹，渡邊眞紀子（秋山元秀・小島泰雄）

財務委員会

１．財務委員会の構成

委員長：村山祐司（筑波大学）

副委員長：生田真人（立命館大学），田和正孝（関西学院大学）

委員：河角直美（立命館大学非常勤講師），熊木洋太（専修大学），松井圭介（筑波大学），松本文子（神戸大学）

２．会議開催までの準備と経過

日本学術会議 IGU 分科会（＝IGU 日本委員会）のなかに準備委員会が発足すると同時に，財務委員会が設置された（2008年３月16日）。財務委員会には，予算案の策定，助成団体への申請書作成，会計処理・管理等の任務が課せられた。財務委員会の第１回会合は，2010年９月13日に京都国際会館で行い，ここで今後の方針や役割分担等を検討した。

予算案の策定については，運営委託会社である日本コンベンションサービス（JCS）が2009年10月に作成した原案をたたき台として，逐次それに加筆修正していく方法をとった。当初 JCS が作成した収支計画では，参加者800人の場合，募金額が目標額（2,000万円）に達したとしても，収入見込みが最大7,697万円，支出見込みが8,272万円となり，575万円の赤字が予想された。参加者が1,000人の場合は，赤字が275万円と想定された。参加者が1,200人になると収支差額がほ

ぼゼロになると試算された。

2010年秋には，組織委員会は日本学術会議に共同主催の申請をしたが，その際支出総額は9,168万円（参加人数1,200人）と見積もられた。ただ，この時点で組織委員会では参加者は800人～1000人が妥当ではないかとの意見が多く出された。2012年６月５日に，2013年京都国際地理学会議（KRC）がIGU日本委員会と日本学術会議との共同主催となることが，閣議で口頭了承された。これにより，講演や発表で使う会場使用料が全額，日本学術会議から助成されることが正式に決定した。

組織委員会は2009年から本格的な活動を開始したため，それに付随して会計処理が2009年度から発生することになった。会計は年度別に収支決算をすることにした。財務委員会では出納簿を作成し，年度毎に原簿をJCSに確認してもらうことで進めた。組織委員会全体の支出は，2009年度が61万円，2010年度は242万円，2011年度は639万円，2012年度は361万円であった。この時点で，組織委員会には参加登録料が入らなかったので，原資はおもに学協会および民間助成団体からの助成金によってまかなわれた。なお，これらの助成は年度毎になされたので，収支決算については，毎年，組織委員長名で各学協会・機関に会計報告が行われた。年度によって余剰金が出ることがあったので，この場合には国立京都国際会館への前払い金として処理した。

2012年度からは財務の活動も本格化した。巡検に伴う会計処理を明確化する必要があったので，その具体的手順については，巡検委員会と合議のうえ，「巡検の事前準備に要する経費の支出と会計報告」（2012年４月18日発効）を作成した。巡検に関しては，巡検の準備と実施に当たって，巡検の事前準備のために支出した経費と巡検当日に支出する経費とは会計処理上，別会計とすることになった。すなわち，事前準備にかかる経費は組織委員会が負担することにし，巡検自体の経費については参加費でまかなうことになった。

2012年７月には，立命館大学に於いて，JCS，会計士，事務局，組織委員長を交えて，会議に向けての会計関係の打ち合わせを行い，ここで，予算書のフォーマット，証憑の整理方法，学協会からの助成金授受の方法，会計監査の対象となる費目の処理方法等を検討した。また，出張にともなう宿泊費，交通費等に関して，旅費規程を作成し，同年９月24日から施行した。

2012年中葉まで円高傾向が続くとともに，周辺諸国との政治的，経済的緊張が深まり，この時期はとくに中国や韓国からは参加者が少なくなることが懸念された。

３．開催年における会計処理および収支決算

2013年度に入ると，事前準備活動が本格化し，財務委員会にはその迅速な会計処理が託された。事務局，各委員会からの見積もり・請求書等が五月雨式に届き，とくに６月以降多くなった。KRCの最中は，プログラム出版委員会と連携して，外国人基調講演招聘者に対する旅費の決済を行ったが，外国人に対する源泉徴収について不慣れなため，支出には苦労した。KRC終了後は，会計処理に追われたが，届く書類が膨大なため，最終的に収支決算がまとまったのは11月中旬になった。11月末に収支決算書（会計報告書）の作成を会計士に依頼し，2014年１月３日に「会計報告暫定版」を受け取った。余剰金の処理を済ませ，監査を経て正式な会計報告書ができあがるのは，余剰金の寄付先の一つとして予定している日本地理学会から，公益社団法人としての性格上，寄付は2013年度ではなく，2014年度に受け取りたい旨の要望があったため，2014年４月以降になる見通しである。会計報告表は，人文地理66巻３号に掲載する予定である。

収支決算の概略（12月末時点）は以下の通りである。2009年からの全体収支では，収入が10,663万円，支出は7,898万円となり，2,765万円の余剰金が生じた。なお，このほか日本学術会議からは会場使用料として，国立京都国際会館621万円，京都大学百周年時計台記念館11万円，招聘外国人滞在費として33万円の助成があったが，この助成は日本学術会議の指示により別会計で処理された。組織委員会は，余剰金のうち，財政支援していただいた４学協会に支援額（2,005万円）の全額を寄付としてお戻しするとともに，その残りを共催団体である10学協会に寄付することを決めた。金額は，各学協会の会員数に応じて比例配分することで了承された。なお，余剰金が多額となったため，当初予定していた京都市からの助成金については，辞退することになった。

余剰金はかなりの額にのぼったが，その理由としては次の３点が指摘できよう。第１に，2013年に入り登録が増えて，会議参加者が当初の予想を大幅に上回る1,431人に達したことがあげられる。ちなみに2010年

第6図　IGU 分科会での村山財務委員長（右端）による財務状況の説明

のテルアビブ地域会議では，参加者は約500人であった。2012年後半からの円安傾向や組織委員会の総力を挙げた発表や参加への勧誘活動が，功を奏したことが大きいと考えられる。

第2に，助成金や募金が伸びたことがあげられる。学協会等からの助成金は，2009年度が50万円，2010年度が200万円，2011年度が200万円，2012年度が300万円であったのが，2013年度は1,455万円に達した。総額2,205万円になった。一方，募金については，経済状況が好転しない中，当初2,000万円という高い目標額が掲げられたが，募金委員会の尽力により，募金総額はそれを大幅に上回る約2,300万円に達し，これが収入増に大きく貢献した。民間企業もさることながら，個人の寄付が多かったことが特筆される。

第3に，各委員会や事務局が，手弁当で業務を遂行し，出費を抑えることに努めたことがあげられる。とくに，プログラムの編集と印刷を運営会社に委託せずに，プログラム印刷委員会が自ら行ったことは経費の大幅な削減につながった。また，各会場に配置する要員を運営会社に委託せず，地理学関係の大学院生や学生に依頼し，雇用費を低く抑えたことも大きい。巡検においては，旅費を辞退しボランティアベースで事前の準備を行ったコースもみられる。事務局においては，日常的活動が多くのボランティアで支えられた。

通常，この規模の国際会議であれば，運営会社に委託する業務は総予算の7割に達すると言われているが，KRC ではこの額が3割程度にとどまったことは特記すべきであろう。

4．反省点と今後の課題

財務委員会は総勢7名であったが，全員が法律に通じた会計業務の専門家ではなかった。このため，当初は，見積・請求・領収書の取り扱い，会計管理規定，旅費規定の作成等，作業は試行錯誤の連続であった。業務に慣れるのに時間を費やし，迅速に対応できず各委員会には迷惑をかけたかもしれない。とくに源泉徴収関連の処理には苦労した。たとえば，外国人招聘者の旅費に関し，航空券を日本国内で購入するかあるいは自国で購入するかで税率が変化するので，そのつど対処方法を詰めなければならなかった。結果として，処理が煩雑になり，支出するのにかなりの時間を費やすことになった。謝金については，一時的報酬かあるいは日雇い業務として処理するかで税率や会計処理の方法が異なり，慎重な判断が求められた。

収支の予想も難題であった。参加登録者の人数によって，収入は大きく変動する。今後国際会議を開催する際には，運営会社に，その時々で登録状況を参考に，最終登録見込み人数の予測をまめに依頼する等の対策が有効かもしれない。

（村山祐司・生田真人・田和正孝）

プログラム出版委員会

1．プログラム出版委員会の構成

委員長：岡本耕平（名古屋大学）

副委員長：吉田容子（奈良女子大学）

委員：加藤茂弘（兵庫県立自然と人の博物館），久木元美琴（奈良女子大学），月原敏博（福井大学），西村雄一郎（奈良女子大学），福田珠己（大阪府立大学），松本淳（首都大学東京），三木理史（奈良大学），山本健太（九州国際大学），渡邊眞紀子（首都大学東京）

協力者：浅田晴久（奈良女子大学），内田忠賢（奈良女子大学），桐村喬（東京大学），高橋信人（宮城大学），二村太郎（同志社大学），前田洋介（新潟大学）

2．業務の内容

プログラムの編成と印刷　プログラムについては，2013年京都国際地理学会議（KRC）のホームページ上に掲載する web 版と，参加者に配布する冊子体の両方を作成する方針で取りかかった。

1）web 版プログラム

コミッション，一般，ジョイント，ポスターの各セ

ッションへのアブストラクト提出締め切りは当初1月15日に予定されていたが，提出の出足が鈍く，2月4日まで延長された。KRCのホームページ上から運営会社である日本コンベンションサービス株式会社（JCS）が管理するwebシステムに提出されたアブストラクトについては，JCSによるデータ整理の後，コミッション委員会から各コミッションの代表者に対し，当該セッションに応募したアブストラクトを審査するよう依頼した。一方，一般セッションに応募のあったアブストラクトの審査は，プログラム出版委員会が担当し，3月中旬に完了した。この審査結果を受け，3月18日に委員会メンバーが集まって一般セッションのプログラム編成（発表日・時間帯・部屋の割り当て）を行った。コミッション・セッションのプログラム編成は，4月14日の委員会にて行った。

ホームページ上での暫定プログラムの公開を5月半ばに控え，5月に入ると本委員会の作業はひとつのヤマ場を迎えた。暫定プログラムの作成にあたり，5月6日には，委員会メンバーに加え，プログラムの基本構成となる発表者データベースの作成を実質的に行うマップコンシェルジュ（株）から1名，JCSから3名が参加し，プログラムのコンテンツやデータの受け渡し等を中心に打ち合わせを行った。加えて，委員会メンバーは，3月18日に行った一般セッションのプログラム編成にかかわる次の作業として，スロット（1スロット：90分4名発表）ごとに発表者を割り当てた。ただし，コミッション・セッションについては，当初からコミッション代表者にスロットごとの発表者割り振りを依頼していたため，本委員会ではこの作業には関わらなかった。5月11，13，16日の委員会では，JCSによる参加費未納者リストをもとに，マップコンシェルジュ（株）の担当者が作成したデータベースから未納者を削除する作業を行い，暫定プログラムの公開に向けて完成度を高めていった。

以上の作業を経た後，桐村喬氏がホームページ公開用のデータとキーワード検索システムを，5月19日に暫定版として公開した。なお，5月30日の委員会では，一般セッションの各スロットに付すセッション・タイトル名の検討を行った。

2）冊子体プログラム

暫定プログラム公開の準備が整った段階から，冊子体プログラム刊行にむけての作業も実質的にスタートした。印刷業者の選定にあたっては，すでに3月～4月にかけて3業者（JCSと京都市内の2業者）から相見積もりを取っていた。経費節約の観点を最重視した結果，中西印刷（株）に決定した。5月16日の委員会には中西印刷（株）からの担当者1名も参加し，冊子体プログラムの体裁・構成，印刷部数，原稿入稿時期等の打ち合わせを行った。経費節約に加え，KRC開催中に参加者が携帯し易いよう，頁数を押さえてモノクロ印刷を基本とすることで意見が一致した。このため，すべてのセッションのアブストラクトは冊子体プログラムには掲載せず，別にUSB版アブストラクト集を作成することとした。

冊子体プログラムは2部構成とし，1部では，IGUのVladimir Kolossov会長をはじめ，KRCの石川義孝委員長やIGU日本委員会の春山成子委員長等からの挨拶や，KRC開催の趣旨，KRC開催期間中の種々のインフォメーション等を収録し，続いて，各セッションのプログラム等を掲載することにした。1部の内容は，セカンド・サーキュラーに掲載されたものと重複するものが多くあった。幸い中西印刷（株）はセカンド・サーキュラーの刊行を請け負った業者であったので，手間が省けた。しかし，あらたに作成する原稿もあり，これは，KRC事務局をはじめ各委員会に依頼した。これらの入稿は，6月中旬までにほぼ完了した。他方2部のプログラムには，1）で作成したweb版のデータ様式を冊子体用に変換（発表日・時間帯・部屋の順ですべてのセッションについてスロットごとに発表者・所属・発表題目をリストアップ）したものである。データの変換作業は，事務局の矢野桂司・佐谷岳穂両氏があたった。このデータを中西印刷（株）に渡したのが6月下旬で，当初の予定よりかなり遅れた。この頃になると，ファンドを得られなかった等様々な事情で，発表や座長の辞退の申し出が相次いだ。これらの変更点をできる限り反映させ，正確な情報をプログラムに掲載したいという方針を取っていたため，データの入稿に遅れが生じた。

冊子体の表・裏表紙については，立命館大学アート・リサーチセンターにデザインを依頼した。提案のあった4パターンのうち，セカンド・サーキュラーの表・裏表紙とイメージの近いデザインを採用することにした。また，表・裏表紙の各内側には，Beta Analytic社とWiley社からの広告を掲載した。

当初校正は2回を予定していたが，初校（7月11日の委員会），二校（7月20日の委員会）の校正段階で，情報の未更新箇所やケアレスミスが多数見つかったため，校正は三校まで行った。こうした作業を経て，総頁数164頁（うちカラー30頁）のプログラムを，1,600部を刊行した。なお，冊子体プログラムは8月3日に国際会館に納品された。

最後に，当委員会はすべて奈良女子大学で開催されたことを付記しておく。

3）USB版アブストラクト集の作成

各セッション発表者のアブストラクトと，web版プログラムをもとに宮城大学の高橋信人氏が作成した，JAVASCRIPT版の検索可能なプログラムを収録するUSBの作成にあたっては，5月の段階で5社から見積もりを取った。短期間に円安が進んだ時期と重なったため，予想以上にUSBの価格が高騰していた。経費節約の観点を重視し，株式会社ビルコート（本社：浜松市）に，500MBのデータを1,600本のUSBにコピーする作業を依頼することとした。その際，USB本体にIGUとKRCのロゴマークを名入れ（印刷）する作業も，ビルコートに発注した。

なお，1980年以降の日本の地理学の動向について，*Geographical Review of Japan Series B*, 86-1（2013）と『人文地理』64-6（2012），65-1（2013），65-3（2013）で特集が組まれたが，これらの論文もUSBに収録することとした。論文のpdfデータは6月初旬に，*Geographical Review of Japan Series B*の若林芳樹編集専門委員会委員長と，『人文地理』の生田真人編集理事からご提供いただいた。

USB版アブストラクト集は，7月29日に，KRC事務局の小方登副事務局長を受け取り人として京都大学に納品された。

4）その後のプログラムの変更作業

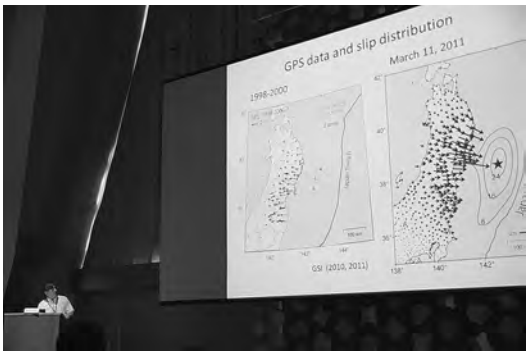
冊子体プログラムの校了データを元に，web版プログラムのデータを更新する作業を7月下旬に行った。さらに校了以降に生じた発表辞退や座長辞退の情報を正確に把握し，それらをリストアップして大会当日に配布する補足プログラムを作成した。また，大会期間中は，プログラム出版委員が交代で会場である京都国際会館の事務局控室に詰め，発表や座長の辞退に対応し，補足プログラムを毎日作成・更新した。

グラント応募者の選考と表彰　KRCでは，経済的に恵まれない途上国からの若手研究者が大会に参加しやすいようにグラントを用意し，大会ホームページで募集した。グラントの内容は，10万円の奨学金と大会登録料の免除であり，奨学金の財源は東京地学協会と人文地理学会から提供された。応募締め切り日である2013年2月4日までに，139名の応募者があった。プログラム出版委員会で，応募者から提出された，発表アブストラクト，推薦状，京都での滞在計画を含む申請書類を下に審査を行い，受賞者10名を決定し，3月末までに審査結果を応募者全員にメールで通知した。さらにグラントの応募者が多数であったことを考慮して，大会登録料の免除のみを行う追加受賞者20名を決定し，4月6日に該当者に通知した。

第7図　KRCグラント受賞者の表彰式

結果的に，グラント受賞者10名のうち8名，追加受賞者20名のうち12名が大会に参加し，閉会式において，グラントの表彰式を行った。なお，IGUも独自のグラント（採択者に一人あたり奨学金1,000ドル）を用意し，応募者41名中31名を採択した。KRCでは採択者の決定に際し，IGUグラントの採択者と重複しないように配慮した。

Springerからの図書出版　KRCでは，大会のテーマ「地球の将来のための伝統智と近代知」に関連する「伝統智」，「環境」，「東日本大震災」の3つのサブテーマを主題とするプレナリー・セッションを設け，サブテーマごとに3名，計9名の講演者を国内および海外から招聘した。9名の講演者にはあらかじめ原稿作成していただき，大会終了後に入稿した。「*Traditional Wisdom and Modern Knowledge for the Earth's Future : Lectures Given at the Plenary Sessions of the International Geographical Union Kyoto Regional Conference, 2013*」のタイトルで日本地理



第8図　東日本大震災に関する基調講演

学会叢書 *International Perspectives in Geography* 第1巻として2014年春に出版予定である。

3．評価および反省点

評価

・コミッション・セッションに加え，一般セッション，ジョイント・セッションを用意し，参加者の多様なニーズに対応した。

・これまでの大会の多くで，プログラムには掲載されているが講演者，司会が会場に現われないケースが見られた。こうした事態をできるだけ避けるために，参加登録状況をプログラム編成に反映するとともに，プログラム暫定版を5月19日にwebに掲載し，コミッション関係者や一般参加者に確認してもらい，変更依頼の連絡を逐次プログラムに反映していった。この作業は大会期間中まで続いた。その結果，比較的正確なプログラムを提供することができた。

反省点

・JCS，マップコンシェルジュ（株），KRC事務局，本委員会がプログラムデータを共有しながら作業をしたが，作業上のケアレスミスによるデータの欠落等を発見し，その修復・確認作業に相当手間取った。

・暫定プログラムの公開は発表者にとって親切な対応であるものの，この公開以降，ファンドが受けられず発表を辞退する者，参加費振り込み期限をオーバーして入金する者等が多数相次ぎ，暫定プログラムから最終プログラムまで大きな変更があったセッションも多い。これは当日まで発表者を混乱させる大きな原因となった。

・プログラム編成という非常に重要な作業のため，5月以降の委員会は，毎回深夜にまで及んだ。授業期間中の作業は，委員にとって大変な負担となった。プログラム編成のほか，139名のグラント申請者の書類の整理，プレナリー・セッション講演者の航空券の手配等様々な業務を行わねばならなかった。

・Springerからの図書出版は，当初，大会までの出版を予定していたが，編集作業が遅れたため，半年遅れの出版となった。　（岡本耕平・吉田容子）

広報アウトリーチ委員会

1．広報アウトリーチ委員会の構成

委員長：小口高（東京大学）

委員：石崎研二（奈良女子大学），伊藤香織（東京理科大学），香川雄一（滋賀県立大学），河原典史（立命館大学），財城真寿美（成蹊大学），祖田亮次（大阪市立大学），橘セツ（神戸山手大学），堤浩之（京都大学），富田啓介（名古屋大学），早川裕弐（東京大学），松村嘉久（阪南大学），目代邦康（自然保護助成基金）

協力者（学生ポスター審査，委員の担当者は除く）：竹内裕希子（熊本大学），田中耕市（茨城大学），森本泉（明治学院大学），宮岡邦任（三重大学）

協力者（ウェブサイト更新）：池田俊介（東京理科大学院生），石黒泰司（東京理科大学院生），大矢遼太（東京理科大学院生），堀口裕（東京理科大学院生），渡邊諒（東京理科大学院生）

2．初期の活動計画の立案と紹介ビデオの作成・公開

2010年9月13日に京都国際会館で開催された2013年京都国際地理学会議（以下，KRC）の第1回組織委員会において，広報アウトリーチ委員会（以下，当委員会）の当面の主要な活動を，1）大会の紹介ビデオの作成，2）サーキュラーの作成支援，3）大会ウェブサイトの構築と更新，4）市民講座の企画と運営とすることが決定された。

同日，組織委員会役員で，当時IGU日本委員会委員長であった氷見山幸夫教授が，KRCをアピールする英語のスピーチを京都国際会館の庭園で行う様子を録画した。その動画を編集する作業を，事務局経由で立命館大学アート・リサーチセンターに依頼し，3分弱のビデオが作成された。2011年1月5日にそのビデオを動画投稿サイトのYouTubeにアップロードし，世界中から閲覧可能にした。

2011年1月には，上記のビデオと，京都国際会館が作成した京都の紹介ビデオを含むKRCの宣伝用

DVD を事務局が作成した。当委員会は，その DVD のラベルをデザインし，配布用のコピーを作成して関係者に郵送した。この DVD は，IGU の2011年サンティアゴ RC と2012年 IGC ケルン大会の日本ブース等で活用された。

３．サーキュラーの作成支援

2011年３月に，石川義孝組織委員会委員長より組織委員会の８つの委員会に向けて，ファースト・サーキュラー用の英語の原稿を６月までに提出するように要請があった。この時点では経費節減を考慮し，サーキュラーのデザインと編集を当委員会の委員が担当する計画であった。しかし，当時流通していた2012年の IGC ケルン大会のサーキュラーが優れたデザインを持ち，委員のデザインでは見劣りする可能性が高いと判明した。その後，事務局がプロのデザイナーを見つけたため，当委員会はサーキュラーの草稿や校正の内容をチェックする形で貢献した。ファースト・サーキュラーは2011年８月に発行され，同年11月のサンティアゴ RC の場等で配布された。

４．大会ウェブサイトの開設と運営

当委員会が発足する以前から，KRC に関する簡単な情報を記したウェブページが存在した。たとえば，石川組織委員会委員長の依頼で仮に作成された人文地理学会のサイトの中のページや，東京経済大学の山田晴通氏が作成したページである。しかし，大会の詳しい情報を伝え，参加登録等も可能とする本格的なウェブサイトが，大会の宣伝と参加者の増加のために必要であった。

最初に事務局と当委員会が，ウェブサイトの全体の構成を検討した。その結果，アブストラクトの投稿や，参加費の支払い等を含むウェブページの作成と運営は，多量の事務作業やクレジットカードによる支払い等を含むため，経験が豊富な運営会社である日本コンベンションサービス株式会社（JCS）に依頼することになった。一方，大会の宣伝や，参加予定者への情報提供のためのウェブページについては，ページのデザインやコンテンツの公開を当委員会が担当することになった。続いて次のようなウェブサイトの基本構成が決められた。１）ウェブページの冒頭は，KRC のサイトであることを明瞭に示す独自ドメイン http://www.igu-kyoto2013.org とし，そこに英語，日本語，仏語のページへのリンクを設置する。２）リンクから到達する諸ページは，東京大学空間情報科学研究センターの小口研究室・早川研究室が運営しているウェブサーバーに置く。３）大会の内容のページから，JCS のサイトにあるアブストラクトの投稿や参加登録へのページにリンクを設置する。

上記２）に関しては，当委員会の伊藤香織委員がコンテンツの整備を主に担当し，ウェブサーバーの管理は早川裕弐委員が担当した。前者の具体的な作業は，デザインに関する技量等を考慮し，東京理科大学大学院理工学研究科建築学専攻伊藤研究室の大学院生がアルバイトとして行った。

2011年９月に，ファースト・サーキュラーの pdf ファイルを事務局経由で受け取り，その内容を複数のページに分けて配置し，さらに全体のデザイン案を検討した。その後，作成された英語版のページを非公開の形でサーバーにアップロードし，事務局と当委員会が閲覧しつつ問題点を指摘し，内容を改善した。また，前記の YouTube のビデオへのリンクと，サーバーにあるファースト・サーキュラーの pdf ファイルへのリンクを設置した。2011年11月３日には英語版のウェブページが公開され，同月14～18日に開催されたサンティアゴ RC で紹介された。その後，仏語版と事務局を中心に整備された和文訳を用いた日本語版の作成も進められた。これらの言語のページは，2011年12月31日に仮公開され，2012年１月11日に正式公開された。その後，事務局と当委員会のメンバーがページをチェックし，記述等を改善する作業が繰り返された。さらに，IGU のコミッションから得た各セッションの情報，募金者・団体の芳名，他の IGU の会議のウェブサイトへのリンクといった情報を掲載するページも随時追加された。

2012年７月にはセカンド・サーキュラーが発行され，その内容をウェブページに反映させる作業を行った。この段階で，仏語と日本語のページは更新を停止し，その後の更新は英語ページのみとすることになった。その後，会議の開催に至るまで，アブストラクトの投稿締め切りの延長といった重要なニュースを含む発信を，ウェブサイトで適宜行った。会議の開催中には，最終的なプログラムの修正のファイル等を連日アップロードし，会議の開催後にも，参加者へのアンケートや会議中の写真を掲載したページへのリンクを設置した。

5．市民公開講座の企画と運営

2010年９月のKRC第１回組織委員会において，2013年８月４日に開催される市民公開講座の企画の概要が承認された。午前中には社会的な知名度が高い方に特別講演をお願いし，午後にはジオパークに関する講演会を地理学者を中心に行うという内容であった。

2012年１月に，特別講演の担当者を事務局と当委員会のメンバーが検討し，芥川賞作家で，お茶の水女子大学地理学科を卒業された楊逸氏に依頼することになった。同年３月には，ご本人の承諾を経た。

ジオパークに関する講演会については，当委員会の目代邦康委員が講演候補者への交渉を含めて担当し，2012年３月に「ジオパークから学ぶ日本の自然と文化」という標題と，講演者（尾池和夫，田邉裕，小泉武栄，菊地俊夫，渡辺悌二，新名阿津子）が決まった。

2013年２月には，市民講座の宣伝に関する検討を事務局と当委員会が行い，ポスターの作成を当委員会の富田啓介委員が担当することになった。また，楊氏による特別講演の後に，楊氏と当委員会委員長の小口が非公開の座談会を行い，その内容を特別講演の内容とともに，古今書院の雑誌「地理」に掲載することが決められた。続いて，特別講演のコメンテーターおよび座談会の三人目の参加者として，大阪府立大学で地理学を専攻し，小説家として活躍中の柴崎友香氏にもご協力いただくことになった。ポスターは2013年５月に印刷され，関係者に配布するとともに，京都市地下鉄烏丸線の京都駅，四条駅，国際会館駅等で配布された。

2013年７月22日には東京大学本郷キャンパスで楊氏，柴崎氏，小口の３名が打ち合わせを行った。また，市民講座の開催会場である京都大学百周年時計台記念館での当日の運営に関する検討を，当委員会の堤浩之委員を中心に行った。８月４日の当日には全ての企画が円滑に行われた。

第９図　市民公開講座での楊逸氏（芥川賞作家）の特別講演

6．学生優秀ポスター賞の選考

KRCでは優秀なポスター発表を筆頭著者として行った学生を表彰することが検討されていたが，2013年３月に，当委員会がポスターの審査を担当することが決められた。その担当者を検討し，当委員会から３名（石崎，財城，小口），他から４名（竹内，田中，森本，宮岡：所属等は冒頭の協力者リストを参照）を選んだ。

続いて，優秀ポスターの選考方法を検討した。審査員を人文系と自然系に分け，それぞれが１～３名程度の優秀者を選ぶ方針が決められた。また，ポスターを評価する観点を記したスコア・シートを準備した。

学生のポスター発表が行われた2013年８月８日には，審査員が可能な限り発表者に質疑を行った。さらに委員が口頭や電子メールで意見を交換した。最終的に，人文系から３つのポスター（自然系との混合と位置づけられるものを含む），自然系から１つのポスターを選出した。

2013年８月９日の閉会式には，選ばれたポスターを発表した学生４名のうち，当日朝に米国に戻らざるを得なかった１名を除く３名が出席し，賞状が授与された。

7．記念切手の発行可能性の検討

1980年に東京で国際地理学会の大会が開催された際には，郵政省から記念切手が発行された。そこで，KRCの際にも記念切手を発行する可能性を，事務局と当委員会が検討した。当委員会では，香川雄一委員が担当者となった。

第10図　優秀ポスター発表者の表彰

記念切手の発行に必要な内閣府への申請を日本学術会議から行うために，2010年10月に日本学術会議，京都市，および京都市左京郵便局との相談を，石川組織委員会委員長らが行った。翌月には，日本学術会議が内閣府への申請を行うことが決定された。しかし2011年12月には，切手の発行予定が2013年であるため，前回の申請に基づく選考は行われておらず，再度申請する必要が指摘された。そこで再申請を行ったが，2012年11月22日に，申請が受理されなかったことが日本郵便株式会社から通知された。

８．評価および反省点

上記の当委員会が関与した活動の中で，唯一成果が得られなかったといえるものは，記念切手の発行である。これに関しては，内閣府や日本郵便株式会社の方針によるところが大きく，可能な活動は限られていた。ただし，記念切手はKRCの根幹にかかわるアイテムとはいえず，発行されなかったことがKRCの運営に及ぼした影響はほとんどなかったと考えられる。

一方，大会の広報と運営に直接的に関係する大会ウェブサイトの構築・更新や，市民公開講座の運営等については，いずれも一定の成果をあげた。たとえばウェブサイトは，大半のページを大学院生のアルバイトが作成し，さらにページを大学のサーバーに設置することにより，大幅な経費の削減と弾力的な運営を可能とした。大会終了後に行われた参加者へのアンケートでも，ウェブサイトの評価は5段階の5（very good）が最も多く，次が4（good）で，両者合わせて8割近くを占めた。

なお，市民公開講座は活動としては成功したが，参加者が約130名と予想よりも少なかった点は残念であった。当日は，かなり高齢の方にも参加いただき，企画に強い関心を持った市民は一定数いたと考えられる。しかし，当日の気温が非常に高かったことが，参加を躊躇させる原因になった可能性がある。また，京都周辺の地理学関係者の多くが，翌日から行われる京都国際会館での大会の準備にあたっていたことの影響も大きかった。ただし，市民講座の特別講演や座談会の内容は，近日中に雑誌「地理」に掲載される予定であるため，当日の内容の伝達が広く行われる状況にある。

（小口高）

コミッション委員会

１．コミッション委員会の構成

委員長：春山成子（三重大学）

副委員長：山﨑孝史（大阪市立大学）

委員：大西宏治（富山大学），金枓哲（岡山大学），河本大地（神戸夙川学院大学），貞広幸雄（東京大学），中川聡史（神戸大学），箸本健二（早稲田大学）

協力者：ヨハネス・キーナー（大阪市立大学院生）

２．活動内容

コミッション委員会では，2013年京都国際地理学会議（KRC）のコミッション・セッションを開催するに当たり，IGCケルン大会での開催手法ならびに開催内容を参考にした。KRCは地域会議ではあるが，すべてのコミッションのセッションが開催されることを念頭に置き，プレ会議，ポスト会議等に分散せずに本会議にコミッション・セッションを集中して開催するようにコミッション代表者あてに依頼することにした。コミッション代表者あての連絡はIGUのMichael Meadows事務局長からコミッションのファイルを2012年5月に受け取り，これをもとにして最初の依頼状を送付した。

しかしながら，2012年8月のIGCケルン大会が4年に1度の本会議であるため，多くのコミッションでコミッションの解散や名称変更，タスクフォースの解散やコミッションへの昇格，さらに，コミッション代表者の変更等の大きな変更があったため，IGCケルン大会以前からコミッション・セッション開催への誘致活動を開始してはいたものの，40コミッションの全容が見渡せるようになったのは，2012年12月末であった。

また，コミッション相互のジョイント・セッションを勧めるIGU役員会の方針のために，コミッション・セッションの立ち上げに合わせて，コミッションごとの相互議論を経て，ジョイント・セッションを申請してきたコミッションが多かった。このため，従来型の単一のコミッション・セッションではなく，こうした複合領域として新規軸の会議方式にも配慮した。コミッションごとに，最大8つまでのコミッション・セッションをたてることを可能として，セッションテーマを受け付けた。ジョイント・セッション開催に際しては，関係するコミッション相互の申請を持ってコミッション開催をすることを決定させることにした。

その結果，15のジョイント・セッションが開催された。

さらに，日本人地理学者のIGUコミッションへの活動参加の活性化も念頭に置き，各コミッションに日本人あるいは日本在住の地理学者のリエゾンを設定した。コミッション・セッション開催に当たり，日本人リエゾンを通して活動が行えるよう工夫した。その結果，従前には交流のなかった日本人地理学者が，コミッション代表者ならびに運営委員会（SC）メンバーと連絡を密にすることにつながった。この活動は，日本人リエゾンがコミッション・セッションの司会者に選定されることにもつながった。また，日本人リエゾンを通して，セッション内容の打ち合わせが進められたコミッションもあった。

3．会議開催までの準備

2012年6月1日　IGUコミッション代表者あてに，KRCでのコミッション・セッション開催依頼メールを送付した。

2012年8月　IGCケルン大会の総会時に，コミッション代表者あてに書面にてコミッション・セッションの開催依頼とともに，コミッション・セッション名称，セッション司会者，セッション内容の申請用紙を配布し，一部を回収した。

2012年8月25日　新規改選されたIGUコミッション代表者あてに，メールで9月末日までに，コミッション・セッション名称，コミッション・セッション内容を返信するよう依頼した。

2012年9月　各コミッションのKRCでの活動補助のため，40のコミッションに対し，SCメンバーの日本人地理学者あるいは専門が近い日本人あるいは日本在住の地理学者をリエゾンとして配置し，彼らを通しコミッション・セッションの内容の拡充・確認を行った。

2012年9月31日　開催確実となったコミッション・セッションのセッション名称ならびに内容をホームページに掲示した。

2012年10月2週目　コミッション・セッションの名称・内容について修正し，コミッションごとのジョイント開催の可否を議論した後，KRCのホームページに修正したセッション内容を掲示した。

2012年11月下旬～12月　コミッション・セッションでの発表申し込みを促すメールを代表者ならびにリエゾンを通して送信した。

2013年1月　アブストラクト提出期限を2月初旬までとすることを，コミッション代表者当てに連絡した。

2013年2月　コミッション・セッションへのアブストラクトを事務局で取りまとめ，アブストラクト審査書類ならびにセッション内の発表者順番確認のための確認書面を，事務局と協議のうえ，作成した。すべて，ホームページ上にて行えるようにシステムを整備した。

2013年3月　アブストラクト審査用書類作成，アブストラクト審査依頼書面（事務局作成）を，運営会社の日本コンベンションサービス株式会社（JCS）からコミッション代表者ならびにコミッション・セッション司会者の両者に送付した。

2013年5月上旬　コミッション代表者からの審査結果を受け取った。

2013年5月～6月　登録料支払いを確認後，コミッション・セッション発表者の順番を決定した。その後，プログラム出版委員会との協議のうえ，コミッション・セッション日程を組み，セッションの部屋の大きさを決定した。

2013年6月～7月　プレ・ポスト会議，巡検等を企画していた8つのコミッション（以下の第3表における C12. 10，C12. 15，C12. 21，C12. 23，C12 29，C12 33，C12 36，C12. 38）の情報を，ホームページの「Announcements from the Commissions」の頁に掲示した。

2013年8月5日～8日　KRCにおいて各コミッション・セッション開催した。

4．コミッション・セッションの開催状況

第3表に，KRCの発表の中心をなすコミッショ

第11図　政治地理学コミッションによる沖縄県北谷町への巡検

第3表　コミッションの名称，KRCのリエゾン，発表件数

コミッションNo.	コミッション名称	Chair（国）	リエゾン	スロット数	発表件数
C12. 01	Applied Geography	Graham Clarke（英国）	中谷友樹	3	12
C12. 02	Arid Lands, Humankind, and Environment	Mahmoud M. Ashour（エジプト）	小方登	3	10
C12. 03	Biogeography and Biodiversity	Udo Schickhoff（ドイツ）	水野一晴	3	12
C12. 04	Climatology	Zbigniew Ustrnul（ポーランド）	松本淳	12	38
C12. 05	Coastal Systems	Edward Anthony（フランス）	海津正倫	4	14
C12. 06	Cold Region Environments	Nancy Doubleday（カナダ）	松岡憲治	2	6
C12. 07	Cultural Approach in Geography	Benno Werlen（ドイツ）	松井啓介	4	14
C12. 08	Dynamics of Economic Spaces	Neil Reid（米国）	Rolf Dieter Schlunze	3	13
C12. 09	Environment Evolution	Tatjana Boettger（ドイツ）	須貝俊彦	3	10
C12. 10	Gender and Geography	Shirlena Huang（シンガポール）	吉田容子	8	27
C12. 11	Geographical Education	Joop van der Schee（オランダ）	井田仁康	7	26
C12. 12	Geographical Information Science	Francis Harvey（米国）	浅見泰司	5	18
C12. 13	Geography of Governance	Jan Bucek（スロバキア）	二村太郎	3	10
C12. 14	Geography of the Global Information Society	Mark Wilson（米国）	原真志	10	35
C12. 15	Geography of Tourism, Leisure, and Global Change	Dieter K. Muller（スウエーデン）	カロリン・フンク	14	48
C12. 16	Geoparks	Dongying Wei（中国）	目代邦康	3	11
C12. 17	Global Change and Human Mobility	Josefina Domínguez Mujica（スペイン）	石川義孝	4	18
C12. 18	Hazard and Risk	Shigeko Haruyama（日本）	春山成子	17	65
C12. 19	Health and Environment	Wuyi Wang（中国）	中谷友樹	3	7
C12. 20	History of Geography	Jacobo García-Álvarez（スペイン）	福田珠己	8	28
C12. 21	Indigenous Knowledges and Peoples' Rights	Brad Coombes（ニュージーランド）	中村尚弘	8	26
C12. 22	Islands	Chang-Yi David Chang（台湾）	須山聡	2	7
C12. 23	Karst	Elena Trofimova（ロシア）	漆原和子	2	9
C12. 24	Land Degradation and Desertification	Paul F. Hudson（オランダ）	小口高	4	13
C12. 25	Landscape Analysis and Landscape Planning	Nodar Elizbarashvili（グルジア）	荒又美陽	1	2
C12. 26	Land Use and Land Cover Change	Ivan Bicik（チェコ）	木本浩一	4	12
C12. 27	Latin American Studies	Juan Manuel Delgado（ペルー）	矢ケ崎典隆	1	5
C12. 28	Local and Regional Development	Michael Sofer（イスラエル）	平篤志	7	27
C12. 29	Marginalization, Globalization, and Regional and Local Responses	Stanko Pelc（スロベニア）	松尾容孝	6	24
C12. 30	Mediterranean Basin	Maria Paradiso（イタリア）	箸本健二	1	3
C12. 31	Modeling Geographical Systems	Yee Leung（香港）	貞広幸雄	5	17
C12. 32	Mountain Response to Global Change	Joerg Loeffler（ドイツ）	渡辺悌二	2	9
C12. 33	Political Geography	Elena dell'Agnese（イタリア）	山﨑孝史	12	42
C12. 34	Population Geography	Etienne Piguet（スイス）	中川聡史	7	21
C12. 35	Sustainability of Rural Systems	Ana Firmino（ポルトガル），金科哲（日本）	金科哲	6	24
C12. 36	Toponymy	Cosimo Palagiano（イタリア）	渡辺浩平	4	14
C12. 37	Transformation Processes in Megacities	Frauke Kraas（ドイツ）	矢部直人	1	2
C12. 38	Transport and Geography	Richard Knowles（英国）	村山祐司	5	19
C12. 39	Urban Commission: Urban Challenges in a Complex World	Celine Rozenblat（スイス）	日野正輝	20	69
C12. 40	Water Sustainability	Claudio Cassardo（イタリア）	森和紀	4	13
		合　　計		221	780

ン・セッションに関係するIGUコミッションの名称，KRCのリエゾン，発表件数等をまとめた。

なお，第3表でのスロットとは，最大8までとしたコミッション・セッション申請時のコミッション・テーマではなく，投稿されたアブストラクトを発表内容に応じて，90分で4発表から構成される単位のことである。合計で，221のスロット，780の発表があった。

5．評価と反省点

コミッション・セッション開催にあたり，リエゾンが大きな役割をはたしたうえ，セッション運営に積極的な活動を行った結果，従来のIGUでのコミッション・セッションと比べると発表のキャンセルが極めて少なかったこと（たとえば，Hazard and Risk Commissionでのキャンセルは，事故死で来日できない研究者の発表1件のみであった），また，セッション内容がよく練られていること等は，参加者から高い評価を得た。しかし，スロット数が多いコミッションでは，パラレルでセッションが設定されざるを得なかったために，すべてのセッションにコミッション代表者ですら参加できないという不自由さもあった。

（春山成子・山崎孝史）

会場委員会

1．会場委員会の構成

委員長：田中和子（京都大学）

副委員長：今里悟之（九州大学），松四雄騎（京都大学）

委員：大石太郎（関西学院大学），河角龍典（立命館大学），鍬塚賢太郎（龍谷大学），古賀慎二（立命館大学），古関大樹（京都女子大学非常勤講師），佐野静代（同志社大学），谷口真人（総合地球環境学研究所），中辻亨（甲南大学），本岡拓哉（同志社大学）

協力者：安藤竜介（大阪大学学生），飯塚隆藤（立命館大学院生），生田愛実（関西学院大学学生），石田曜，石原薫，井出健人（京都大学院生），井上大輔（関西学院大学学生），井上玲佳（同志社大学院生），上野裕也（大阪大学学生），大澤光（京都大学院生），大隅来，大塚駿（大阪大学学生），小川拓也（大阪大学学生），可靖涵（京都大学院生），蟹江恵，上條将吾（大阪大学学生），苅谷翠，川崎祐輔（同志社大学学生），川嶋美貴子，顧平原，小泉慶太郎（立命館大学院生），小塩和博，財津信，齋藤鮎子，佐伯直樹（京都大学院生），佐藤弘隆（立命館大学院生），柴田広志（京都府立大学研究員），渋谷健太，清水沙紀（京都大学学生），下田幸嗣，白神桐子，白神桜子，鈴木花歩（同志社大学院生），蘇小津，竹岡佳子（大阪大学学生），立元圭（京都大学学生），田中利和（京都大学非常勤研究員），谷勇哉，谷崎友紀（立命館大学院生），谷端郷（立命館大学院生），張君（大阪教育大学院生），張潔（京都大学院生），張是宗，張美琴（京都大学院生），陳奕均，陳由瑋，露木啓悟，デブナール・ミロシュ（京都大学院生），寺岡郁夫，徳山倫子，中澤芽衣（京都大学院生），長島雄毅（京都大学院生），仲田志織（京都大学学生），永田彰平（立命館大学院生），永田匠（立命館大学院生），中西雄二，中野真帆（京都大学院生），波江彰彦，西本周平，平賀緑（京都大学院生），平田康人（京都大学院生），廣瀬恵理奈（京都大学院生），藤夏人，古沢ゆりあ，方阿離（立命館大学院生），堀内千加（関西大学非常勤講師），馬貝妮（京都大学院生），松井佳世，松谷実のり（京都大学院生），三上純子，御手洗なつ実，宮本良和（大阪大学学生），村上晴澄（立命館大学院生），山村侑子，山本功（京都大学学生），楊興，米川尚樹（同志社大学院生），米島万有子（立命館大学院生），劉征宇（総合研究大学院大学院生），林鎂茹，和田美野，渡部重輝（大阪大学学生），他2名

（※氏名と所属は，本人の了解があったもののみ掲載）

2．業務に関する打ち合わせと準備作業（○打ち合わせ，◇準備作業）

○2010年9月13日，京都国際会館で，第1回組織委員会が開催され，会場委員会から2名（谷口，田中）が出席した。組織委員会の全体構成と役割，準備計画等について説明が行われた。

○2012年1月20日，キャンパスプラザ京都で，事務局，会場委員会等の打ち合わせが行われ，会場委員会から4名（今里，古賀，松四，田中）が出席。会場委

員会の担当業務の検討と整理を行った。

◇ブース展示の募集と集約（古賀）。

○2013年４月23日，京都大学文学部で，事務局，JCS と会場委員会の打ち合わせが行われ，会場委員会から４名（古賀，古関，松四，田中）が出席した。会場委員会の担当業務ならびに，会場委員会協力者の資格や労働条件，謝金（９～17時は1,200円，９時までと17時以降は1,300円），募集要項等を検討した。

◇会場委員会協力者の募集（５月～６月）（会場委員全員）。「応募要項」「応募票」を作成し，各委員の所属大学の他，大阪大学，大阪教育大学，京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・人間・環境研究科・文学研究科（言語学，社会学）で募集を行った。募集に協力してくださった堤研二，山近博義，水野一晴，小島泰雄，小方登，吉田豊，松居和子の諸氏に厚く御礼申し上げる。

応募者には，英会話能力とパワーポイントの操作能力の自己申告を求めた。最終的に83名を会場業務担当の協力者として委嘱した（うち１名はボランティア）。会議直前に，業務マニュアルの一部差し替えのため，さらに１名の協力を得た。

◇京都国際会館の下見（田中）。2013年６月４日，国際会館で開催中の国際会議の各会場を廻り，備え付けの機器（PC，プロジェクター，スクリーン，時計等）と専用ブース，掲示関連の設備品，ポスターパネル等の様子を見学し，報告をまとめ，会場委員会で回覧した。

◇会場委員会協力者と会場委員の勤務シフトの作成（松四）。応募者の集計と並行して，暫定プログラムをもとに，シフト表を作成した。プログラム変更に対応してシフト表を調整する作業は，会議開始直前まで続いた。

◇会場係（会場委員会協力者）マニュアルの作成（今里）。国内外の学会のマニュアルを収集し，座長や発表者へのプログラム出版委員会からの通知内容を踏まえて，マニュアルを完成させ，会場委員会委員と協力者用に100部余り印刷した。

◇業務小物（ネームタグ，担当場所を示すつり下げプレート，残り時間表示プレート，座長マニュアル，席表示用の三角柱，タイマー等）や収納ケースの作成と調達を行った（佐野）。

○2013年６月10日，京都国際会館で，事務局，京都国際会館，プログラム出版委員会，会場委員会の打ち合わせが行われ，会場委員会から２名（松四，田中）が出席した。会場設備や連絡機器，電子掲示板，昼食と飲料支給等について，具体的に検討した。

○2013年６月30日，キャンパスプラザ京都で，会場委員会の打ち合わせを行った。出席者８名（今里，河角，古賀，古関，中辻，松四，本岡，田中）。会場委員会の業務内容，委員の役割分担，国際会議開始までの準備計画，会場委員会協力者への説明会，委員同士および委員会と協力者との間の連絡方法，会期中の委員の勤務シフトや昼食支給のルール，服装等を検討した。

会議期間中における会場委員会の担当業務は，発表・講演・会議の進行補助，ポスターとブースの展示の管理，各階のフロア案内，会場委員会控室の管理運営等である。

委員の役割は，以下の通り：ブース展示（古賀），ポスター展示（田中），勤務シフト（松四），会場係マニュアルと現場統括（今里），小道具作成・調達（佐野），携帯電話機調達（河角），とりまとめ全般（田中）。

発表会場に必要な小道具（担当箇所プレート，座長マニュアル，残り時間カード，タイマー，プログラム等）は，会場ごとに収納ケースに入れ，整理することとした。

会場委員会の関係者としての識別のために，委員と協力者は，T シャツ（IGU 2013 Kyoto），会場委員会専用のネームタグ，担当箇所を示すプレート（つり下げタグ形式）を着用することにした。

◇謝金の振込依頼書の様式を作成した（田中）。

◇会議期間中の緊急連絡手段として専用の携帯電話（賃貸，３台）を手配した（河角）。

◇会場委員会専用の Gmail メールアドレスを取得した（松四）。

◇ T シャツ（一人当たり２着，計190着と予備）の受け取り，昼食の発注，委嘱状（83通）の受領を行った（田中）。

３．会場委員会協力者への説明会

2013年８月４日午後１時～４時，京都国際会館において，会場委員会協力者の人たちに対する説明会を開催した。説明会終了後，会場委員会控室の設営を行った。11名の委員（今里，大石，河角，鍬塚，古賀，古

関，佐野，中辻，松四，本岡，田中）が参加し，会場業務担当の協力者83名中，80名が出席した。

説明会では，受付の際に，協力者に委嘱状とＴシャツの配付，謝金の振込依頼書の回収を行い，全体説明では，出勤・退勤の届け出やネームタグの取り扱い，勤務シフトおよび業務マニュアルの解説等を行った。さらに，8班に分かれて，国際会館内を歩き，発表会場やフロア，展示会場等の様子を見学した。

４．会期中の業務と連絡体制

2013年８月５日～８日の会場運営業務の担当箇所は，口頭発表，基調講演，各種会議のための33会場，およびブース・ポスター展示のためのアネックスホールⅠであった。

発表会場での協力者の担当業務は，主として発表者補助（パワーポイントファイルのPCへのインストールと機器の操作補助）および座長補助（プログラムと座長マニュアルの提示と進行時間の伝達）。各階フロアの業務は会場内と会場委員会や控室への連絡および会議参加者への案内，展示会場の業務はポスター掲示の補助と交替時の撤収補助やブースの片付け等，控室の業務は出勤・退勤・休憩の時刻管理と記録および事務局からの連絡等の掲示等である。

会場委員は各階フロアの要所と控室に詰め，協力者および会場委員会，組織委員会事務局，国際会館事務局との連絡にあたった。フロアと控室，国際会議場事務局との連絡には，国際会館より借用のPHSと会館の内線電話を使用した。

携帯電話は委員長と副委員長の３人が所持した。会場委員会専用のGmailでの連絡・通知も随時行った。

８日の全セッション終了後，展示会場ならびに控室の片付け作業を行った。

第12図　展示ブース

５．残務処理

2013年８月９日，京都大学文学部で，会場委員会協力者への謝金計算と書類作成を行い，財務委員会に郵送した（今里，松四，田中）。９月24日，謝金の算出根拠の資料を財務委員会に郵送した（田中）。

６．総括

会場委員会の業務は，担当内容がほぼ確定した2013年４月下旬から実質的な準備を始め，会議終了と同時に残務整理を終えるという，比較的短期集中型の業務であった。ただ，プログラムの確定が遅れたことや委員会間の情報伝達が必ずしも万全ではなかったことにより，シフト調整の作業が最後まで続くことになった。

全体として円滑な会場運営ができたのは，なによりも会場委員会協力者と会場委員の熱心で積極的な対応による。とりわけ事前説明会にほぼ全員が出席し，遅刻や早退もほとんどなく，臨機応変に事態に対応してくれた会場委員会協力者の方々に深く感謝している。

（田中和子）

地理オリンピック委員会

１．地理オリンピック委員会の構成

委員長：井田仁康（筑波大学）

委員：今本暁（比叡山高校），岩本廣美（奈良教育大学），香川貴志（京都教育大学），草野元太（大阪府立春日丘高校），石代吉史（龍谷大学附属平安高校），小橋拓司（兵庫県立加古川東高校），辰己勝（近畿大学），戸井田克己（近畿大学），永田成文（三重大学），西岡尚也（大阪商業大学），春山成子（三重大学），二村太郎（同志社大学），水野恵司（大阪教育大学），森田浩司（大阪府立大手前高校），吉水裕也（兵庫教育大学）

２．KRCまでの準備

国際地理オリンピックの開催は，IGUの国際地理学会議および地域会議の開催の条件となっている。そのため，地域会議の京都招致が決まったのと同時に，日本での国際地理オリンピックの開催が決まった。ただし，国際地理オリンピックの会場は，開催国であれば，必ずしもIGU大会の開催都市とは限らない。しかし，本大会との接続や交通の利便性等を考慮すると，京都およびその周辺での開催が妥当と考えた。また，委員だけでは実施が難しく，多くの協力委員（高校教

員等）の必要性も予想され，京都，大阪，奈良といった関西の地理教員の結束性が強いということも京都での実施での大きな要因である。

国際地理オリンピック京都大会準備委員会の結成は2010年９月であるが，2009年つくば大会終了後，2010年台湾大会，2011年メキシコ大会，そして2012年ドイツ大会に日本選手団のチームリーダーやオブザーバーとして関西の委員を派遣し，京都大会の運営等のイメージアップや実質的な事務を行ってきた。

また，下記の通り21回の準備委員会を実施した。

第１回　2010年９月13日（月）（京都国際会館）
第２回　2010年11月20日（土）（奈良教育大学）
第３回　2011年１月22日（土）（近畿大学）
第４回　2011年３月13日（日）（近畿大学）
第５回　2011年５月15日（土）（近畿大学）
第６回　2011年６月５日（土）（近鉄桃山御陵前駅前）
第７回　2011年８月３日（土）（比叡山高校）
第８回　2011年10月22日（土）（大分大学）
第９回　2012年１月22日（土）（近畿大学）
第10回　2012年３月11日（日）（近畿大学）
第11回　2012年５月12日（土）（近畿大学）
第12回　2012年６月３日（日）（奈良教育大学）
第13回　2012年８月31日（土）（ホテル平安の森京都）
第14回　2012年10月６日（土）（神戸大学）
第15回　2012年11月17日（土）（立命館大学）
第16回　2013年１月12日（土）（近畿大学）
第17回　2013年３月10日（日）（近畿大学）
第18回　2013年４月20日（土）（兵庫教育大学大阪サテライト）
第19回　2013年５月25日（土）（兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス）
第20回　2013年６月15日（土）（兵庫教育大学大阪サテライト）
第20回　2013年６月15日（土）（兵庫教育大学大阪サテライト）
第21回　2013年７月14日（日）（ホテル平安の森京都）

上記の準備委員会以外にも，国内予選，国際大会への問題提供を行ってきた。特に，京都大会でのフィールドワークテストに向けた問題作成には，かなりの時間を費やした。

第１回の準備委員会後に，開催までの長期スケジュールが提示され，それに基づいて準備が進められた。

第13図　国際地理オリンピック京都大会の開会式

資金的にはかなり厳しかったので，安い宿舎の確保等を計画していたが，当初予定した宿舎のキャンセルがあり，京都，奈良，滋賀等で宿舎をあたったが，利便性，試験会場も兼ねられ，食事の配慮もしやすいことから宿舎を「ホテル平安の森京都」とした。

３．参加状況とプログラム

第10回国際地理オリンピック京都大会は，選手126名，チームリーダー63名，その他オブザーバーや日本のスタッフ，および高校生ボランティアを含めれば380名規模で実施された。参加国・地域は32で，2012年開催のケルン大会と並び過去最高の参加数となった。フィールドワークテスト（FWT）１やエクスカーション等の行事を除き，ほとんど全ての行事が主会場であるホテル平安の森京都で行われた。参加国・地域は以下の通りである。

選手派遣国・地域：アメリカ合衆国，イギリス，インドネシア，エストニア，オーストラリア，オランダ，カザフスタン，クロアチア，シンガポール，スロバキア，スロベニア，チェコ，台湾，中国，デンマーク，ナイジェリア，日本，ニュージーランド，ハンガリー，フィンランド，ブルガリア，ベラルーシ，ベルギー，ポーランド，香港，マカオ，メキシコ，モンゴル，ラトビア，リトアニア，ルーマニア，ロシア（以上32か国・地域）

オブザーバーのみ参加：イラン

選手向けプログラムは，第４表の通りである。

なお，各国チームリーダー（TL）のうち１名は，各テストの採点者としての仕事を分担することとなっているため，この１名と選手のプログラムは一部異なっている。なお，第14図は，８月１日に行われた伏見区でのフィールドワークテストの一齣である。

第4表　地理オリンピックの選手向けプログラム

月日	主な内容	
7月 30日(火)	午後 夜	受付 開会式
31日(水)	午前 午後 夜	筆記テスト（WRT） ミニ・エクスカーション FWT ブリーリング（レクチャー）
8月 1日(木)	午前 午後 夜	FWT1（伏見区） ↓ フリータイム
2日(金)	午前 午後 夜	FWT2（ホテル） カルチュラル・ファンクション準備 ポスター・プレゼンテーション
3日(土)	午前 午後 夜	マルチ・メディアテスト（MMQ） フリータイム（京都市内散策） カルチュラル・ファンクション
4日(日)	午前 午後 夜	日帰り巡検（比叡山，琵琶湖方面） ↓ 銀メダルリスト・銅メダリスト表彰式
5日(月)	午前 午後	金メダリスト表彰式（京都国際会館） 解散，ポスト・エクスカーション出発 （河口湖畔泊）
6日(火)	午前 午後 夜	富士山麓，風穴等 東京スカイツリー 隅田川クルーズ（成田泊）
7日(水)	午前	解散

第14図　伏見でのフィールドワークテスト

上記のプログラムのうち，5日の金メダル表彰式は，京都大会の最も華やかな行事であった。4日の夜に，「ホテル平安の森京都」において，銀メダリスト，銅メダリストの発表，メダルの授与，全員への参加証の授与がおこなわれたが，金メダリスト11名については，IGU 開会式の中での実施となった。世界から集った地理学者の前で，金メダルは，秋篠宮ご夫妻ご臨席のもとで，福井文部科学副大臣から選手一人一人に授与された。

また，表彰式後，日本人選手4人については，別室で記者会見が行われ（第15図），今回の感想等が選手から述べられ，テレビおよび新聞記者等により質疑応答等がなされた。

第15図　記者会見会場での日本人選手

4．課題

・組織づくり：準備委員会は，関西在住の地理学・地理教育研究者，中・高教員を中心に組織された。関西地域における地理教育実践者・研究者のネットワークづくりに貢献できた。一方，公用語が英語となっているため，タスクフォース（TF）や各国 TL との対応，査証申請，FWT 問題作成等を英語で行う仕事量を考え，英語の運用能力の高い人材を十分確保しておくことが課題である。

・申込み：レジストレーションフォーム等を回収・整理するのに非常に手間取った。選手等情報を各国で一覧表にしてから送付してもらうように変更が必要である。また，査証申請等にも多くの労力が払われた。

・会場：主会場としてホテルを利用したことにより，移動が最小限で済んだことが最大のメリットであった。しかし，MMQ はスクリーン5台をシンクロさせての実施となり，課題が残った。また，費用は大学を会場とするのに比べかなり高額となった。

・FWT：TF との調整が難航し，試験問題が直前まで完成しなかった。

・プログラム：台風による暴風を想定した場合，FWT の日程変更がどの程度可能かという事が課題であったが，今回は幸い天候に恵まれた。

・選手強化：日本代表4選手の成績は銀メダル1，銅メダル1，国別順位は32か国・地域中15位であった（昨年は同22位）。昨年までは FWT が課題であったが，今年は WRT の得点にばらつきが見られた。

・ポスト・エクスカーション：70名程度の参加者があった。選手決定の時期が地理オリンピック直前とな

るチームがあり，ポスト・エクスカーションの参加者数が直前まで確定しなかった。

以上は，京都国際地理学会議組織委員会の中の地理オリンピック委員会としての報告である。国際地理オリンピック京都大会としての総括的な報告については，『新地理』および『第10回国際地理オリンピック京都大会実施報告書』を御参照いただきたい。（井田仁康）

巡検委員会

１．巡検委員会の構成

委員長：堤研二（大阪大学）

副委員長：内田忠賢（奈良女子大学），野間晴雄（関西大学）

委員：上杉和央（京都府立大学），金科哲（岡山大学），木本浩一（広島女学院大学），久保純子（早稲田大学），小松原尚（奈良県立大学），境田清隆（東北大学），島津俊之（和歌山大学），千木良雅弘（京都大学），堤浩之（京都大学），友澤和夫（広島大学），松田隆典（滋賀大学），三木一彦（文教大学），村山良之（山形大学），森正人（三重大学），山神達也（和歌山大学），山下潤（九州大学），山元貴継（中部大学）

２．業務の内容

当巡検委員会の業務は，大きく分けて以下の４つであった。各項目ごとにそれらの概要を記す。

巡検コースの計画　2013年京都国際地理学会議（KRC）において，当初計画された巡検は，以下の第５表の通り16コースであった。このうち，実際に成立したのは６コース（第５表中の★印分），不成立となったのが10コースであった。

巡検コースは，2007年12月にIGU役員会に提出した招致計画書において，国内巡検，国際巡検の暫定案が書かれていた。なお，この中には，韓国，台湾，ロシアへの巡検案に言及があったが，これは，KRCの招致の段階で国際巡検の実施という形を通じ，これら３ヶ国から協力の了承をいただいた経緯を踏まえたものである。また，国内巡検については，組織委員会が発足した2010年９月から，巡検委員会を中心に，招致計画書に書かれた暫定案を，実行可能性という点から見直しがなされた。具体的には，各コースごとに巡検委員への就任とコース担当をお願いし，計画や下見をしていただく形となった。前年（2012年）のIGCケルン大会では，１日ツアーと半日ツアーの２種別が設けられていたが，今回のKRCでは，4種別16本のコースが計画された。ケルン大会では不成立のコースが多かったと仄聞していたので，巡検委員会の内部では巡検の不成立を危惧する声が聞かれなかったわけではなかった。設定コースの多さだけでなく，東日本大震災の影響や，盛夏・炎暑期の開催であること，ケルン大会の盛況の反動等，不安材料が複数あったが，各担当者は精力的に準備に当たった。ポストコングレス海外ツアーに関しては，日本側の窓口を巡検委員会委員が務めたものの，行き先国の方でも，窓口担当者をお願いした。韓国がMin-Boo Lee先生（Korea National University of Education），台湾がJiun-Chuan Lin先生（National Taiwan University），ロシアがPeter Yaklanov先生（Pacific Geographical Institute）であった。

第５表　当初計画された巡検一覧
（種別，コース記号，コース・タイトル，担当委員）

(1)１日ツアー
OD-1　京都近郊：上杉
★OD-2　奈良・天理・飛鳥：小松原，内田
OD-3　琵琶湖と滋賀県南東部：松田
(2)半日ツアー
★HD-1　洛北：野間
HD-2　京都盆地東部：堤（浩）
★HD-3　京都大学防災研究所：千木良
(3)ポストコングレス国内ツアー
PD-1　神戸・大阪：堤（研）
★PD-2　関東平野と東京：久保，三木
PD-3　倉敷・広島・福岡：友澤
★PD-4　高野山：島津，山神，森
PD-5　中部日本：山元
PD-6　東北沿岸部：村山
PD-7　東北内陸部：境田
(4)ポストコングレス海外ツアー
PI-1　韓国：金
PI-2　台湾：山下
★PI-3　ロシア：木本

巡検委員会内部の協議は，もっぱら電子メールを主たる媒体として行った。一方で，KRCのオフィシャル・ツーリストであるJTB西日本と巡検委員会の担当委員の間で協議して，コース計画を練り上げていった形となった。JTBの当初の担当者は小谷正樹氏であったが，転勤によってその後任として細川弘嗣氏が担当された。JTBと各コースとの関係は，濃淡さま

ざまであったが，巡検参加費の全体的なとりまとめ窓口はJTBに委託されていた。

各巡検コースの成立・不成立の確定　2013年6月6日の段階で，巡検の成立・不成立および申込み延長を見極めた結果，申し込み者の少ない10のコースを不成立と決定した。奈良・天理・明日香コースと京都大学防災研究所コースは成立するものとし，洛北コース，関東平野と東京コース，高野山コース，ロシアコースの4本については，申込期限を延長した。その結果，6月12日段階で，申込み期限を延長していた4本も成立させることとした。

トラベル・デスクの設置　KRC開催の8月4日から9日までの会期中，会場である京都国際会館の1階フロアにトラベル・デスクを設置し，朝から夕方までJTBの細川氏と補佐役の株式会社TEIの野口知美氏が常駐され，巡検委員会の正副委員長（堤，野間，内田）も交代で着席した。当委員会の久保純子委員にも，このデスクで種々の業務をしていただいた。このデスクでは，巡検関係のほかにソーシャル・プログラムや交通・宿泊関係の相談等に対応した。会場での紛失物やその他の事柄についての相談も寄せられたので，一時は「よろず相談所」のような状況にもなったが，相談者には幅広く対応した。

巡検の催行　8月5日に会議の各種セッションが始まり，いよいよ順次，各コースが催行されていった。以下にその概要を述べる。なお，以下の各コースの参加者の数は，JTBを経由しない参加者も含めた実人数である。

① OD-2：奈良・天理・明日香コース

8月8日実施。参加者14名・案内者5名（小松原尚，内田忠賢，竹田義則，信藤博之，小林史穂子）。参加費1万円。京都に集合し，飛鳥の農村景観，高松塚，奈良市の景観，入江泰吉記念奈良市写真美術館，東大寺等のコースを巡回した。

第16図　トラベル・デスク

第17図　奈良公園への巡検

② HD-1：洛北コース

8月6日午後実施。参加者22名・案内者2名（野間晴雄，谷口真人）。参加費3千円。京都国際会館に集合し，深泥池，総合地球環境学研究所，上賀茂神社をタクシー分乗で巡った。

③ HD-3：京都大学防災研究所コース

8月9日午後実施。参加者13名・案内者6名（千木良雅弘，間瀬肇，Pochien Hsiao, 林和宏，三浦勉，土井一生）。参加費2千円。現地集合。防災研究所の概要説明，2011年東日本大震災時の津波と2011年台風12号による深層崩壊の説明，耐震実験施設，地震予知研究センター地震観測システム，地すべり再現実験施設の見学を行った。

④ PD-2：関東平野と東京コース

8月10日～12日実施。参加者17名・案内者7名（久保純子，菊地俊夫，有馬貴之，山崎晴雄，大内俊二，飯塚遼，高橋環太郎）。参加費4万6千円～4万9千円。8月10日9:30東京駅丸の内中央口に集合し，皇居，銀座，歌舞伎座，秋葉原電気街，末広町，浅草寺，お台場，国分寺お鷹の道，真姿の池，平市下水道博物館，玉川上水，立川断層崖，瑞穂町耕心館，羽村まいまいず井戸，羽村郷土博物館，御殿場高原，長尾峠（箱根外輪山），姥子，大涌谷，強羅，箱根園，駒ヶ岳山頂，芝公園プリンスタワー，東京駅・新宿等を周回した。

⑤ PD-4：高野山コース

8月10日～11日実施。参加者22名・案内者3名（島

第18図　JR 東京駅丸の内中央口にて

津俊之，山神達也，森正人)。参加費 3 万 8 千円。京都駅八条口に集合し，高野山の大門，金剛峯寺，壇上伽藍，高野山霊宝館，徳川家霊台，奥の院を巡った。

⑥ PI-3：ロシアコース

8 月11日～14日実施。参加者 8 名・案内者 5 名（木本浩一，Peter Ya Baklanov, Antoloy V. Moshkov, Paval S. Belyanin, A. S. Lankin)。参加費 6 万 1 千円。Vladivostok に集合し，Russian island, Barabash, Kondratenovka, Gornotaezhnoe, Ussuriysk, Spassk-Dalniy, Hanka Lake, Gayvoron を回った。

3．評価および反省点

会議参加者へのアンケート結果によれば，巡検関係では辛口の評価がなかったわけではないが，猛暑の中で移動をすることとなったために，参加者の苦労もあったと思われる。しかし，何よりも大きな事故がなく，全巡検を無事に終えることができたことを大きな喜びとしたい。また，巡検全体での収支は赤字にならずに済んだ。末筆ながら，とくに巡検委員会の皆様，案内者の皆様，ならびに JTB 西日本や TEI の各位に厚く御礼申し上げる。（堤研二）